

---

# けいおん！～戦場でも歌うよ！～

秋秋刀魚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！〜戦場でも歌うよ！〜

### 【Nコード】

N2841U

### 【作者名】

秋秋刀魚

### 【あらすじ】

朝起きて。

登校して。

授業を受けて。

みんなでお昼ご飯食べて。

また授業を受けて。

みんなで演奏して。

みんなでお茶して。

みんなで笑う。

そんな毎日が続くと思っただ。  
なのに…。

内容に一部過激な表現及び鬱展開が含まれる可能性があります。  
二次創作だからってキャラ優遇はありません。場合によっては死亡  
もあり得ます。ご了承ください。

作中に登場する組織、施設、地名は実在の物と一切関係ありません。  
作中の自衛軍は自衛隊より米軍に近いです。

感想、意見、頂けたら嬉しいです。作者の動力源となります

## Prolog

硝煙と死臭が漂う街で、いや厳密には今までは街だった。だが数分前に瓦礫の山に変わった街跡の中央広場で唯は空を見上げた

「どうしたんだ？唯」

空を見上げたまま動かない唯に律は思わず聞いた

「なんか…なんか悲しいな〜って」

「悲しい？」

律は聞き返した

「うん。だってさ、3ヶ月前まで私達普通の高校生だったんだよ？  
なのにさ。なんでこんな事してるんだろって」

唯は今紺の制服ではなく緑を主体とした迷彩服や防弾ベストに身を包み89式小銃と呼ばれる日本製のライフル銃を手にしている。世間一般に言われる”兵隊さん”の格好そのものだった

「そりゃあ…。しょうがないだろ。今は戦争中なんだし…」律は唯と同じように空を見上げ答えた。彼女の格好もほぼ唯と同様だ

「なんでこんな事になっちゃったんでしょうか…」

梓はその小さな体には似合わない重たい無線機を背負い瓦礫の山から上がる煙を見ながら呟いた

「わからない。でも…」

「でも？」

「またみんなでバンド出来るよね？」

そう言って笑った唯の笑顔が綺麗で、そしてどこか悲しげで梓は思わず泣きそうになった

「当たり前だろ？」

「そうですよ！」

それを聞くと唯は力強く頷いて明るい笑顔を見せた

「だよね！」

先ほどの悲しげな微笑みとは違う子どものような無垢な笑顔。それを見て梓はまた泣きそうになった

「ホラ。回収地点でみんなが待ってるから行くぞ！」

3人は走り出した

その上空を輸送ヘリの編隊が大きな羽音を奏でながら通過した

## 開戦

3ヶ月前

「朝鮮半島が北朝鮮により統一され大朝鮮連邦が誕生したことはまだ記憶に新しいですね。一方敗退した韓国軍兵が日本に流れたことによる韓国亡命政府の誕生や大朝鮮連邦との関係悪化…。自衛隊を自衛軍に改編…。」

5時限目。

昼食後で空腹も満たされしかも春の暖かい気候。ただでさえ眠くなるどころに更につまらない授業が追加されると平沢唯には起きていられる気力はなかった。

「平沢さん!…平沢さん!」

「んあ…?」

唯は寝ぼけ眼を擦りながら顔をあげ教師と目が合つと苦笑いを浮かべた。

「おはよございませす…。へへへ…。」「まったく!今学期何度目ですか?こんなじゃ進学出来ませんよ…?」

「はい…。」

しぶしぶ上体を起こしシャーペンを握るが五分後には完全に頭を垂れていた。

## 放課後

桜高軽音楽部は今日も練習前のティータイムを楽しんでいる。

「先輩達も今年で引退ですね…。」

1年の頃はこれを快く思ってた梓も今では毒されつつあり細の特性ミルクティーの入った自分用のカップを手にしている。

「うん。時間ってホントあっという間だねー。」

唯は梓の言葉に頷きながら細が持ってきたクッキーを口にした。

「最後だからそのぶん気合い入れてやらないとな。」

澪は一瞬やる気に満ちた顔を見せ紅茶のカップに口をつけた。

「わー！このクッキー美味しい！」

「ベルギーで買ったの。」

「ムギ最高！」

澪の話を聞いていたのは梓だけのようだ。

「聞けー！！」

「漣先輩…。」

クッキーもすべて平らげカップも空にし彼女達はやっと重たいその腰を上げた。

「じゃあ練習始めるか。」

全員が軽音楽部として本来あるべき姿になっていく。

「準備OK!」

唯はギー太と名前を付けるほど溺愛するギターを肩から掛けた。

「いいぞ。律。」

漣もエリザベス（名付け親：唯）というベースを構えた。

「OKです。」

紬も大切にしているキーボードを今すぐ弾きたそうに律を見た。

次々と準備完了の合図が出る中梓だけはただ何かを見て固まっていた。

「梓ちゃん…?」

不審に思った絀が梓に声をかけた。

「先輩…あれ…。」

梓は動揺した様子で窓の外を指差した。

「…！嘘…。」

それは日本人なら誰もが見たことがある光景。

「東京あたりですよね…？」

教科書。特別番組。映画でも取り上げられ「悪魔」と称された兵器

「あれって…。」

その悪魔が降臨した形跡が見て取れた。

「核兵器…。」

東京上空を巨大なキノコ雲が覆っていた。

5月18日

開戦

**開戦（後書き）**

感想。指摘

お待ちします。

## 避難

核爆発が起き慌てて校庭に出ると校内に残っていた生徒や教師の全員が東京方面に出現した巨大キノコ雲を見ていた。

「あなた達！」

その声に振り返ると軽音楽部の顧問の山中さわ子が慌てた様子で駆けてきた。

「あなた達すぐに帰りなさい！爆発直前にラジオで聴いたんだけれど朝鮮の軍用機が日本に向かってるそうよ！」

「って事は…。」

律が眉をしかめた。

「ええ。間違いなく戦争になるわ。さあ！楽器持って帰るなら早く！行って！」

さわ子に急かされ急いで楽器を取りに戻った。

「急ごう！」

部室をでる直前、唯は振り返り部室を見渡した。

(いつかまた…戻ってこれるよね…。)

帰り道

自衛軍の装甲車やトラックが列をなして走っている。桜ヶ丘駐屯地からやって来た部隊だろう。彼らを引き連れているジープからは核爆発の事や戦争が始まるとスピーカーで市民に避難を促している。

《本日午後3時半頃東京で核爆発が起きました。それと同時に大朝鮮連邦軍機が日本の領空内に侵入。市民の皆様は至急桜ヶ丘駐屯地に…》

軽音部メンバーと別れを告げ家までダツシユした。

「憂！」

自宅の玄関を開けると共に大切な妹を呼んだ。

「お姉ちゃん！」

玄関に飛び込むといきなり憂が飛びついてきた。よほど不安だったのだろう。顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。今両親は仕事の都

合で海外にいるため家にいるのは唯と憂だけだ。

「避難するから準備して！」

唯が姉としてちゃんと指示を出すと憂は涙を拭いた。

「うん！ちょっと待ってて！」

憂が奥に消えていった間に唯はキッチンに向かった。鞆の中を空にし菓子パンや缶詰め、ペットボトル飲料を放り込む。そして紙切れに伝言を書く。

”憂と桜ヶ丘駐屯地に避難します。連絡ください。”

それを画鋲でキッチンのコルクボードに固定した。万が一両親が帰って来たらすぐにわかるようにだ。

「準備出来たよ！」

家の全ての鍵を閉め家を出た。

時間がないので2人とも制服のまま。所持品は貴重品と食料、そしてギー太。

桜ヶ丘駐屯地に向かうには街の中心部を商店街を通り抜ける必要がある上に駐屯地は山の麓。かなり時間が掛かる。バスやタクシーを使おうにも軍によって交通規制が掛けられ道路は渋滞。

駅はキロに届きそうな程長い長蛇の列。やはり徒歩が最善策のようだ。

商店街に垂直に走る道に入ったとき、一瞬薄暗くなった。

「…？」

なぜ気がつかなかったのか。なぜこれほどの大音量に気がつかなかったのかと唯は後悔した。

答えは簡単だ。それほど逃げることに必死だったからだ。

空を覆い隠すほどの輸送機の編隊が重いエンジン音を響かせ桜ヶ丘上空を飛行していた。

その大編隊からは次々と何かが落とされた。

それがパラシュートにぶら下がった空挺部隊の降下兵士達という事に2人が気がつくのに時間はかからなかった。

しかもそのパラシュートは1つや2つではない。ゆうに3桁は越えているのは確かだ。

《どいて下さい！緊急車両停車します！》

突如角からジープが現れ次々と通りに自衛軍の車両が進入してくる。中には高射砲（対航空機用の大型機関銃）まであり対空戦闘を意識している。トラックから次々と歩兵が降り立ち小銃ライフルを上空の降下兵に向ける。人々は慌てて兵士達から離れた。

「撃てっ！」

ありとあらゆる銃口から一斉に弾薬が撃ち出された。あまりの銃声

に2人は小さく悲鳴を上げ電柱の影に隠れた。 ドサツ

目の前に何かが落ちてきた。所々小さな穴の空いた大きな円形の布、真ん中あたりは盛り上がっている。

唯がそれを凝視すると盛り上がった部分が赤く染みになっている。染みはどんどん広がり最終的には布全体を赤く染めた。2人は地面に座り込み動けなくなった。腰が抜け脚に力が入らない。

目の前を何かが通り抜けトラックが爆発した。爆風が2人を襲った。少し先で地に降り立った降下兵がRPG（対戦車ロケット）を放ったのだ。

誰か助けて！

唯は叫んだつもりだったが。声にはならなかった。だが

「早く！立って！」

この若い兵士には届いたのか。

若い兵士は2人を無理やり立たせ建物と建物間のスペースに無理やり押し込んだ。

「隠れてて下さい！」

そう言っつて部隊に戻って行った。だが…

「戦闘機だー！」

耳をつんざくような轟音が響き爆発音が聞こえた。

そして銃声が止んだ。

少しでも顔を出し様子を見てみる。

そこには焼け焦げたトラックに装甲車。

肉の塊、手足。そこにはさっきの兵士と思しき死体もあった。

唯は吐きそうになり口を押さえた。

憂も見ようとしたので止めた。このような気持ちにさせたくないという姉としての優しさから。

上空を見上げると一機の戦闘機が火を噴きながら山に墜ちていった。

## 空戦

15分前

桜ヶ丘付近上空

各飛行場からスクランブルした8機のF-15Jが輸送機13機、護衛機のSu-27が18機の大朝鮮連邦の輸送機編隊と少し距離を置き飛行している。

F-15

西側最強と唱われた制空戦闘機。未だに撃墜にカウントされた事がない。

「スカイアイ。防空指令所はいつになったら撃墜許可を出すんだ？」  
F-15パイロット、ランサー1こと野原武雄があきれ気味に言った。

『わからん。』

『ランサー2、こいつあ十中八九空挺だ。もうすぐ桜ヶ丘上空に入る。今潰さないと必要以上の血を見る事になるぞ。』

自衛隊から軍になっても未だに撃墜出来ない事にランサー2は苛立ちを隠せなかった。所詮は”自衛”なのだ。

「もう一度呼びかける。『This is Japanese air self defense force. Korean…』(こちら日本国航空自衛軍だ。大朝鮮連邦機に告ぐ。直ちに反転針路を取れ。)」

無反応。当然だ。朝鮮語で呼びかけても同じ、警告回数はこれで二桁になった。軍に改編されてもまだ戦闘経験のない空自は完全に嘗められている。

「『(こちら日本国航空自衛軍だ！大朝鮮連邦機に告ぐ！直ちに引き反転針路をとるんだ！)』」

中国語、スペイン語、フランス語。やけくそ気味に警告したがやはり無駄だった。

『チツ…。防空所がチンたらしてるから…。』

桜ヶ丘市街地が見えてきた。

特産物ナシ。私立桜ヶ丘女子高校の文化祭の軽音楽部のライブがちょっと有名らしい。と武雄は同僚から聞いていた。

敵の狙いは桜ヶ丘にある陸自の桜ヶ丘駐屯地を押さえる事だろう。ここを陥落させれば陸自の関東方面軍を一時的にマヒさせる事が出来る。

輸送機の後部ハッチがゆっくりと開きだした。

「後部ハッチが開いたぞ！空挺だ！ガンの使用許可を！」

ハッチが開いたことにより露わになった貨物室内にはギッシリと兵士達が詰まっついていて出番の時を待っていた。

『やっぱり空挺…。』

空挺部隊の兵士達は今にも飛びだそうと貨物室内で準備を整えている。

『どつする気だ？撃墜許可は出ていないんだぞ。』

「撃墜しなきゃいいんだろ？ランサー各機、援護しろ！」

『了解！』

一気に輸送機に近づいた。

「FOX3（機関砲発射）！」

20mmバルカン砲から放たれた弾はまっすぐと輸送機の貨物室に吸い込まれ中の兵士達を引き裂いた。貨物室からバラバラと兵士の手足、胴体が墜ちていく。貨物室内で空挺部隊を潰すつもりだ。

それでも足りずランサー1が体勢を立て直した時には殆どの空挺部隊が桜ヶ丘で地上戦を繰り広げる為に降下を開始していた。

2機のSu-27が高度を下げ通りに展開していた陸自部隊に機関砲を浴びせた。機関砲攻撃をマトモに受けたトラックや装甲車が爆発し鉄くずに、兵士達は血しぶきをあげミンチになった。

それを見て武雄は舌打ちを漏らした。目の前で仲間が死んだ。防空指令所が許可さえ出していれば防ぐ自信があった。

『防空指令所から撃墜許可が出たぞ！』

「遅えよ…！エンゲージ（交戦）！FOX2（ミサイル発射）！」  
ランサー1が放ったサイドワインダー誘導ミサイルは優れた誘導システムによりSu-27に吸い込まれ撃墜した。

『FOX2！FOX2！』

1発目はギリギリかわしたが2発目からは逃げられず撃墜されたSu-27は火を噴きながら山へ墜ちていった。

『ランサー1、気をつける。ロックされているぞ。』

「ああ…。」

武雄は操縦桿を思いっきり引いた。機首がみるみる上がりGの影響で気を失いそうになりながらもロックしてきたSu-27の後方につく事に成功した。

「FOX3！」

「残り戦闘機4機。輸送機13機。輸送機はガンで充分だ。」

武雄は引き返していく輸送機の前に入る。コックピットにガンの照準を合わせた。

「FOX3」約3秒、輸送機パイロットは痛みも感じなかっただろう。輸送機はみるみる高度を落とし山に突っ込んだ。

「残り4と12…。」

もはや武雄はゲーム感覚だった。

流れ作業のように輸送機のパイロットをミンチにし落としていく。

「残り3と9！」

狂気じみている。

僚機の活躍もあり最後はS u - 27だけとなった。

「『最後の警告だ。死にたくなければこちらに同行しろ。』」

強制着陸させようという考えだ。そうすれば情報も聞き出せる。

だがS u - 27は針路を反転させ逃げ出した。

「逃がすかよ。」

キレた武雄は蛇のようだった。

「FOX2」

ミサイルは逃げ出したS u - 27をバラバラにした。

## 開始

下水溝に入ってからどれぐらい日にちがたっただろうか。

ここにいるのは蜘蛛、ネズミ、ゴキブリ…そして逃げ損ねた人間。

唯と憂もここにいた。地上では陸自と大朝鮮連邦軍が激しく衝突していてここには陸自の指揮所が置かれ、負傷兵や死体も運び込まれている。だからいつもここは呻き声や悲鳴が絶えずに聞こえている。

唯と憂はそれを我慢しながら負傷兵の介抱を行っていた。

「ありがとう…。」

今日の最後の負傷兵に水を飲ませると少し離れた場所へ行き壁にもたれ座り込んだ。

髪はもうごわごわで顔にはホコリや血で汚れている。

「お腹空いた？」

「少し…ね。でも大丈夫だよ。」唯の問いに憂は無理に笑顔を作った。

「はい！食べなさいな。」

靴からジャムパンを取り出し憂に渡した。

「え？でも…。」

遠慮がちにパンを受け取った。

「私は大丈夫！」

鼻を鳴らし胸を叩いた。実際は空腹感をかなり感じていたが元気がない憂に食べて貰いたかった。

「…さ…。な？」

「…すよ。…ん。…」

「…?」

聞き覚えのある声が暗闇の奥から聞こえた気がした。耳をすましてみる

「唯も憂ちゃんも無事だといいけど…。」

律だ。

「唯先輩達なら大丈夫ですよ…！」

梓だ。

唯は思わず立ち上がり暗闇の奥へと駆け出した。

見つけた。

見覚えのある後ろ姿4人、梓に漣に律に紬だ。「あゝず〜」

ツインテールの少女に狙いを定め地を蹴った。

「にゃんっ！」

思いつきり抱き付き頼ずりする。

「にゃっ!?」

「「唯<sup>ちゃん</sup>!」」

3人がびっくりしたがすぐに嬉しそうな声を上げた。

「みんな無事でよかったよ。」

「梓ちゃん!みなさん!」

続いて憂も現れ

「憂!無事でよかった。…唯先輩…。はなしてくださいよ…。」

そう言った梓は涙ぐみ言葉とは裏腹に抵抗はしなかった。

「梓ちゃんが一番唯ちゃんの事心配していたもんね。」

「…」

「あずにゃん…。心配かけて…ごめんね?」

梓を抱く力が少し強まった。

「……まあ無事でよかったです…。」

梓はボソツと照れ気味に言った。

#### 下水溝内指揮所

ランプの僅かな光を頼りに将校達がノートパソコンや無線機と格闘している。

「桜ヶ丘市内に降り立った空挺はあらかた制圧しました…。全体的な状況は？」

この男も少佐という立場でここにいた。

《日本海側の県全てで朝鮮軍の上陸が確認されている。海自の抵抗したがなんせ奴らは質より量で攻めてくるからな。対処しきれないようだ。既に我が軍は戦力の20パーセントを損失している。そこで早乙女国防大臣が対策を打ち出した。》

《……。》

「…それって…。」

《わかってくれ少佐。国連が動かない今国を守る手立てはこれしかないんだ。》

「…了解…。」

「中尉！」

「はい！」

「ここにいる憲兵は？」

「第13憲兵隊が6名ほど」

「すぐに集めてくれ。」

「了解！」

下水溝

「そうなんだ。大変だったね。」

「お互いにね。」

「奥に集まって下さい！調査事項があります！」

突然MPと書かれた腕章をした兵士が声を張り上げ走り去った。

「なんだろう……。」「

漣が腰を上げた。

「とりあえず行ってみようぜ。」

律の後に全員が続いた。

これが運の尽きだった。

5月24日

15歳〜35歳の男女強制徴兵

実施

訓練(前書き)

『三浦あゆみ』

映画「ジャーナル」

## 訓練

仕掛け爆弾が爆発する度に振動が地面を通じて匍匐前進する腹まで響く。バラバラと土と小石がヘルメットに当たりコツコツと音を奏でる。漣は爆発が聴こえる度に怖じ気づいて匍匐前進を止めてしまっていた。

「秋山！止まるな！戦場でもそうやって止まるつもりかあ！？」

教官の容赦ない激が飛び漣を追い詰めていく。

そのたび律を初めとした桜高の者達は怒りを覚えたが頭上に張り巡らされた有針鉄線と爆発、さらに両サイドで睨みを聴かせている教官達から滲み出る迫力を前に行動出来ずにいた。

「漣さん！頑張つて！あと少しですから！」

隣のコースの憂の励ましが利いたからなのか先輩としての意地からなのか漣は顔を上げ64式小銃を抱き直し土の上を進み始めた。

「おらおら！立って次に行け！」

唯達は桶邪馬陸軍学校オケヤマにいた。

戦地から少し離れたこの学校は徴兵した学生の訓練所となっていた。

昼は通常の学業に励み放課後と土日はペンと消しゴムを自動小銃とコンパスに持ち替え軍事訓練に励む。

唯達放課後ティータイムは放課後のティータイムと演奏を取り上げられ代わりに軍事訓練を押し付けられ落胆していた。

これじゃ放課後軍隊タイムだね…。と誰かが冗談を言っていたが笑えなかった。訓練終了 午後5時半

1番厳しいと言われていた初日の訓練を終え武器庫に小銃を返却しへトへトになった訓練生達は兵舎やシャワールームに向かっていた。

「キツツイよな〜。」

律が顔の泥を手の甲で拭った。

「もう帰りたい…。」

食欲さえ失せるほどキツイ訓練に唯はグッタリとしていて足はもうガクガクだ。憂の肩なしでは歩けないかもしれない。

「なんとか。初日は終わりましたね…。」

梓はそう言つと溼を見た。

「どづした?」

予想とは裏腹にいつも通りの溼だった。

( てつきり落ち込んだりしてるのかなって思ってた…。 )

午前1時 女子用兵舎

16台用意されたベッドの中では訓練に疲れきった女子達が夢の世界を楽しんでいた。

人数確認の為に来た女性教官が出て行くのを確認すると律は上半身を起こした。隣のベッドで溲眠っている溲が心配で眠れなかった。今日1日で相当な精神的ダメージを負った溲を律はほづつておけなかつた。

「溲……。」

小さな声で隣のベッドの盛り上がり声に声を掛ける。

「……。」

「溲……起きてるだろ？」

「……。」

律は諦め深くため息を尽き布団に潜り込んだ。

「律……。」

小さすぎてギリギリ聞こえる程度の声が盛り上がりから聞こえた。

「やっぱり起きてたか。」

律は上半身を起こし溲を見た。

「なんでこんな事になっちゃったんだろう…?」

鼻から上を布団から覗かせ漣はそう言う。

「私にもわからないよ…。」

その問いばかりは誰も答える事はできないだろう。

「家に帰りたい…。帰りたいよ…。」

漣の目に涙が溜まっていく。

律は黙って立ち上がり漣を見下ろす形で横に立った。

「大丈夫だよ。みんないるんだし…。」

漣の目からこぼれ掛けた涙を優しく親指で拭ってやり話を続ける。

「脱走兵は射殺されるって話だから逃げられないけど、それなりの手柄を立てれば除隊させてもらえるってさっき兵士達が言ってたから…。私達も手柄立ててみんなで帰ろう?」

「…うん。」漣はまるで子供のようだった。

「だからそのためにも頑張ろーぜ?」

「うん。頑張ろう。」

漣はそう言って最後に律に礼を言った。

律は澪が眠った事を確認するとベッドに入り自らも眠りに落ちた。

「……………」

律とは逆側の澪の隣のベッドで梓は2人の寝息を聴くと静かに目を閉じた。

なんだか切ない気持ちになった。

## 訓練（後書き）

感想 指摘 アドバイス  
お待ちしております

## 父親

琴吹財閥系横浜ビル 社長室

「紬が徴兵されただと…?」

「はい、桶耶麻に弾薬を運送した社員から目撃情報と写真が…。たつた今軍当局から徴兵についての知らせが…。」

斎藤が琴吹に渡したのは2つの封筒。

1つは戦闘服姿の紬が隊列走をしている風景の写真が。  
もう1つは機械的で無感情な徴兵の謝罪文が入っていた。

「一難去ってまた一難か…。やはり迎えを送るべきだった…。」

煙草のフィルターをキシリと音を立てて噛み潰した。

「斎藤。」

「ハッ。」

「車を用意してくれ…。」

「かしこまりました。」

斎藤が部屋を出ると琴吹は空になった煙草のケースを握りつぶし床に落とした。

琴吹にはひとつ強みがあった。

これを利用すれば紬が帰ってくるかもしれない。彼はそう考えながらエレベーターのボタンを押した。

係員に通された小さな小部屋にあったソファに腰を下ろし煙草をくわえた。

火を着け肺を煙で満たしたが苛立ちと不安が消える事はなかった。

1本目を吸い終え硝子の灰皿に押し付けると扉が開き軍服を着た色黒の巨漢があらわれた。

「久しぶりだな。稲葉。」

ソファから立ち上がり軍の制服を来た巨漢と握手を交わす。

「ああ。同窓会以来だな。…で？なんの用だ？今月の兵器納入はすんでるだろうか？」

稲葉は琴吹と向かい合うように腰を下ろした。

琴吹財閥は楽器の他にも琴吹重工という軍需企業も経営している。

「ああ…。折り入って頼みがある。徴兵の事だ…。」

徴兵と耳にした瞬間稲葉の目つきが変わった。

「悪いが徴兵した者の理由のない退役は出来ない。」

なぜわかった？と言いたそうな琴吹を見て稲葉は冷笑した。

「今週に入って何度も来たよ。大手企業の社長や政治家共が子供を返せってな。お前も娘だか息子を徴兵されたのか…。」

やはり皆考える事は一緒だった。

「先日ＩＴの社長が憲兵に逮捕されて警察に引き渡されたよ。賄賂でな。お前も妙な気を起こすなよ？」

「頼む…。 たった一人の大事な娘なんだ…。 今年で最後の高校生活なんだよ…。」

「無理なものは無理だ。」

稲葉は頑として姿勢を崩さない。寧ろしつこく食い下がる琴吹に苛立ちを覚えていた。

「娘を返さないと言うなら私の工場の生産ラインをストップさせて軍への兵器納入を止めるぞ！」

琴吹は声を荒げた。

「そんな事すれば国家反逆罪で逮捕するぞ。今は１人でも人員が欲しいんだ。」

だが稲葉は態度ひとつ変えずに答えた。余裕そうなその態度に琴吹はキレる直前だ。

「紬が帰ってくるなら…構わんさ…。」

目は決意の堅さを示すように血走っている。

「考えてみる。1人返したら兵から非難が殺到する。そうしたら軍は終わりだ。戦争に負けたら娘は殺されるか敵の性奴隷だぞ。」

「クッ…。」

「今は我々に協力してくれ。学兵には戦争勝利後防衛省があらゆる支援を行うつもりだ。」

「……。」

結局の紬の兵役は続行のままだ。

「おかしいものだな…。普段は相手にもしないのに…。突然寂しくなる…。紬は昔は私に愛情を要求していた。なのに私は自分と仕事の事ばかり…。いつしか話もしなくなつた…。私は紬にとって父親

ではなく”同居人”だったのかもしれないな…。」

琴吹は助手席にもたれ横浜の夜景を眺めながら呟くように言った。

「齋藤…。私はどうしたらいい…？」

琴吹は運転席の齋藤に聞いた。

その頬には涙が伝っている。

「ただ…お嬢様の無事を祈りましょう…。無事帰って来たら目一杯  
誉めてあげなさい。自分が社長以前に父親だということはどうかお  
忘れにならずに…。」

齋藤は優しく微笑みハンドルをきった。

## 父親（後書き）

感想 指摘 アドバイス  
お待ちしております。

## 番外編：解説

階級…（だいたいの目安）

将軍…最高司令官

大将…方面軍司令官

中将…師団長

少将…師団・旅団長

准将…旅団長

大佐…連隊長

中佐…大隊長

少佐…中隊長、大隊長補佐

大尉…中隊長

中尉…小隊長、中隊長補佐

少尉…小隊長

（これより上が将校）

准尉…小隊長補佐

曹長…班長

軍曹…分隊長

伍長…分隊長補佐

兵長…分隊長補佐

上等兵…組長

一等兵…一般兵士

二等兵…訓練兵

方面軍…数個の師団、旅団から成る。

師団…数個の連隊、大隊から成る。

旅団…数個の連隊、大隊から成る。

連隊…数個の大隊、中隊から成る。 人員は約3,000名程度。

大隊…数個の中隊、小隊から成る。 人員は約600名程度。

中隊…数個の小隊から成る。 人員は約200名程度

小隊…数個の分隊、班から成る。 人員は約40名程度。

班…7名～10名の兵士から成る。

分隊…5～8名の兵士から成る。

組…2～4名の兵士から成る。

陸軍新兵の訓練についての解説

(学生訓練兵)

1 週間目 (歩兵基礎訓練)

基本的説明、支給品支給、座学、体力作り、射撃訓練、敬礼練習等の基礎、兵科適性検査

2 週間目 (ポジション訓練)

分隊決め(6人で1分隊)、ポジション適性検査、各ポジションの

訓練（必要最低限の技術を一週間で叩き込まれる）

### ポジション

分隊長（分隊指揮官）

副分隊長（副指揮官）

小銃手（ライフル兵） 分隊支援火器手（軽機関銃手）

無線兵（無線士）

選抜射手（歩兵と狙撃手の中間）

3週間目（最終訓練）

分隊ごとに訓練（基礎、強襲、夜間、e t c）、座学、3日間の最終演習、修了式、配備先の発表

分隊長：秋山 澗 軍曹

副分隊長：田井中 律 伍長

小銃手：平沢 唯 兵長

分隊支援火器手：琴吹 紬 兵長

無線兵：中野 梓 一等兵

選抜射手：平沢 憂 一等兵

分隊分けについて

チームワークが大切なため知り合い同士で組ませたほうがいいと言  
う将校の意見から。∴ 実際は物語の都合上

### 武器解説

89式5.56mm自動小銃（使用者：澗 律 唯 梓 憂）

AR-18を基礎に日本が開発したアサルトライフル。使用弾は5・56mm普通弾。強化プラスチック製で64式小銃より軽くなっている。戦国自衛隊1509やSIRON2に登場。

FN MINIMI（使用者：緬）

通称ミニミ、ベルギー製の軽機関銃だが日本もライセンス生産している。重さ10kg近くと結構重い。凄まじい連射で木をなぎ倒せるためSAWノコギリとも呼ばれるがSAWとは分隊支援火器を表すStandard Automatic Weaponの頭文字から来ている。

64式7.62mm自動小銃（使用者：訓練兵）

戦後初の日本製の小銃。使用弾が7.62mmで反動が89式に比べるとデカい。現在は訓練兵が狙撃兵しか使用していない。

兵科（陸上自衛軍）

歩兵科：地上戦の要。機動力、火力、近接戦闘能力を有する

砲兵科：大砲、自走砲で離れた敵を圧倒的火力で制圧する。また地对空ミサイルや高射砲などで地对空攻撃も行う

機甲科：戦車などの装甲車両で敵を圧倒する。偵察も行う。

工兵科：戦場の建築業的な存在。地雷処理も行う。

航空兵科：ヘリや偵察機を保有し地上部隊をサポートする。

通信科：各種通信電子機材で部隊間の連携をサポート

武器科：火器、車両、武器、弾薬の補給や整備を担当、不発弾処理も

需品科：食糧、燃料、需品器材等の兵士の生活をサポート

輸送科：車両、物資、部隊の輸送を担当

化学科：各種化学器材で放射能などで汚染された地域、人員、装備を除染

憲兵科：軍隊内の警察、交通整理や治安維持も行う

会計科：兵士の給料の支払い、物資の費用などの会計業務を担当

衛生科：負傷兵の治療、施設への後送を担当、防疫や兵士の健康管理を行う

音楽科：パレードなどのイベント時の演奏を担当。演奏を通して兵士の士気向上を行う

情報科：情報分野の専門技術や知識で情報収集、情報処理を担当

澁達は歩兵科

**配属（前書き）**

秋山 澁 軍曹

・ 田井中律 伍長

・ 平沢唯 兵長

・ 琴吹紬 上等兵

・ 平沢憂 一等兵

・ 中野梓 一等兵

以上第12訓練分隊

第15師団隷下第59連隊D中隊第3小隊に配属

## 配属

1機の手ヌーク大型輸送ヘリが機体の前後に付いた大きなローターで砂煙を巻き上げながら着陸した。後部ハッチがゆっくりと開く。

「うっわー。いかにも”軍隊の基地”って感じだなー。」

「戦車がいっぱいだよ！りっちゃん！」

先に非日常的な光景に若干テンションを上げた律と唯が降り立ちそれを見守るように漣と紬、梓と憂が降り立った。彼女達は装備と私物の入った鞆を両手に基地の光景に不安と興奮を覚えた。

敷地内には深緑のテントやコンテナ、戦車や装甲車が並びそれらの間を兵士達が行き来している。

片隅では黒い大きな袋が積みそれの近くでは兵士が穴を掘っている。ヘリの離発着場の片隅のテントから2人の男女が漣達目掛けて走って来た。男は迷彩服と帽子、サングラスを着用していて威圧感があり女は迷彩服の下だけを着用し上は支給品のTシャツで美人な顔立ちだ。

「君達が新兵だな？」

男の背丈は185cm以上はあり彼女達を完全に見下ろす形で漣に聞いた。

「は、はい！ほ！本日から配属になりました！秋山ま、み！漣軍曹

以下5名です！」

慌てて漣が敬礼し唯達も慌てて敬礼する。

すると河原はサングラスを外しニコリと笑った。

「第15師団第59連隊D中隊指揮官の河原大尉だ。赤城基地へようこそ。こっちは第3小隊指揮官の真木葵少尉だ。」女はその短くカットした亜麻色の髪を揺らし前に出た。

「真木葵です！よろしく！ギターとか持ってるみたいだけど…。バンドとかやってたの？」

葵は興味深そうな目つきで唯と漣、梓の背中の中のケースを見た。

「はい！」

「私もやってたよー。高校時代に部活でさー。」

律がそれに食い付いた。

「私達も部活でやってるんですよ！ちなみにパートは何を！？」

「基本ドラムだけどベースもやってたよ。」

「りっちゃんと漣ちゃんと一緒にだねー！2つも出来るなんて凄いです！」

唯がやや興奮気味に言った。

「いやあ〜。」

「真木。そろそろ設備案内を。」

「あつ。スンマセン…。」

基地の敷地面積は約43・000m、今はなき東京ドーム約1個分。ヘリポートが2カ所。基地の北西部には砲兵の榴弾砲が5門設置、設備などはあまりよくない、と基地についての様々な説明を受けた。ちゃんとした基地ではなく新地に設備を置いただけの臨時的な基地らしい。

最後にテントが連なるエリアの一角のテントに連れてこられた。

「ここが君達の天幕<sup>テント</sup>ね。私物や装備なんかは全部ここに置いて。」

木と布でできたの簡易なベッドが6つと壊れ掛けた扇風機とテーブルが1つ。床は土。

律（マジかよ。）

漣（こんなところで暮らすの!?!）

梓（先輩達大丈夫かな〜?）

憂（皆さん大丈夫かな…。特にお姉ちゃん…。）

紬（なんかキャンプみたいで楽しそう。）

唯（あの扇風機の動力ってどうなってるんだろ?）

感じ方は人それぞれだろうだ。

「何か質問は？」

「ハイ！」

唯が勢いよく挙手した。

「はい。」

「あの扇風機の電源ってどうなってるんですか！？」

「せ、扇風機…？あ…ああ、あれね。外の延長コードに繋がってるの。」

葵は戸惑い気味に答えた。

「ありがとうございます！」

（変わった子ね…。）

「じゃあざっと技術が見たいから。装備品付けて待ってて。」

「はい。」

5分後

「第3小隊…気をつけっ！」

ザッ！という音をたて唯達の目の前で兵士達が一斉に両脚を揃え直

立、いわゆる”気をつけ”の姿勢になった。  
唯達はその迫力に圧倒され緊張状態にあった。

「やすめっ！…では新入りの紹介をする！」

真木がチラリと唯達を見て軽く手招きしたので慌ててそれに従う。

「本日配属された。秋山濤軍曹以下5名だ！彼女達は学生兵だ。いろいろサポートしてやってくれ。じゃあ礼して。」

「……………よろしくお願いします！」「……………」

彼女達は頭を上げると兵士達が誰もが無反応である事を知った。

それがなんだか機械的で悲しかった。

（うまくやっていけるのかな…？）

**配属（後書き）**

感想、指摘、アドバイス  
お待ちしております

## 日常

### 配属から4日

紹介時には無反応だった小隊の兵士達は訓練などの”業務”が終了すると真っ先に唯達のもとに集まり歓迎の意を示してくれた。

今のところ作戦も敵の襲撃もなくただ訓練だけの日が続いている。

『A2チーム6ポイント！B3チーム4ポイント！B3チーム頑張つて！』

初夏の日差しの下、唯達を含めた第3小隊のメンバー達は3on3のバスケットに興じていた。

審判は葵。現在小隊最年長のチームと試合をしている。

ギャラリー含め全員戦闘服はズボンだけで上は支給品のシャツだけだ。「ムギ！パスパス！」

「りっちゃん！」

紬の鋭いパスが律の胸に向かって飛んだ。

「ナイスパス！」

律はそれを両手でがっしりと受け取ると目の前で立ちはだかっていた男を一気に抜いた。

「クソッ！」

だがまた別の男が立ちはだかった。

「憂ちゃん！」

横にいた憂にワンバウンドさせボールを送った。

「はい！」

憂はそれを受け取ると前に出てシュートの体勢になった。

ボールは憂の右手から離れ綺麗な弧を描きゴールに向かって落ちていく。

「行けえ！」

シュートは綺麗に決まった。

ボールがゴールを抜け地面に落ちた瞬間終了のブザーが鳴った。

憂がシュートを打った位置はスリーポイントラインの外側。

いわゆるスリーポイントシュートだ。

『3ポイント！タイムアップ！6、7でBチーム勝利！』

律と紬が憂のもとに駆け寄り補欠要員だった唯濤梓もそこに加わり憂を讃えた。

ギャラリーからも歓声が上がりAチームは苦笑いを浮かべ”俺達も

歳かねえ”とこぼしている。

唯と律の社交的な性格のおかげでたった4日間で彼女達はすっかり小隊に馴染んでいた。

「あつぢー…。娯楽室行こうぜー。」

シャツを汗で濡らした律はミネラルウォーターの入ったボトルを空にし提案した。

娯楽室とは兵士達の娯楽の為に設置されたプレハブ小屋でネット、DVDやゲーム、雑誌や漫画が置いてある。

「そうだな。今日は休みの人は少ないみたいだし…。行くか？」

漣も納得し決定した。

「今日は何のDVD観ようか？あずにゃん！何がいい？」

「私は…。音楽系が観たいです。ずっとアクションとかサスペンスばかりだったし…。」

「じゃあ行こうか？」

紬がそう言っていると皆が足を進めたが憂は何か思い立ったように立ち止まった。

「じゃあ私PX（基地内の売店）行ってきますね。皆さん飲み物何がいいですか？」

「あつ、いいよ憂ちゃん！私も行くからさ。」

漣が立ち止まり憂を振り返った。

「じゃあ私コーラ。」

「私も。」

「私は行くわ。」

「私も行きます。」

「……。」

漣と梓が律と唯を横目で見つめる。

「なんだよ！！私と唯が悪者みたいじゃないか！」

「りっちゃん……！」

「唯……！」

2人は手を握りあつた。

「死ぬまで一緒だよ……！」

「なにをやっているんだ……。」

漣のあきれ気味のツツコミにしぶしぶ握りあつた手を解除し

「私達も行きますよー。」

「もーしょうがないなあ。」

とPXに行く気になった事を告げた。

PXはプレハブの倉庫を改修したものらしく外見は倉庫そのもので入口に”PX（売店）”とかかれた看板があるだけだ。看板が無かったらただの倉庫にしか見えないだろう。

その扉を開けた。

「いらっしやいませ。」

レジの向こうの禿掛けた男性店員が優しく笑った。

「はじめて来たけどなんでもあるんだー！」

「ええ、飲食物から電気機器まで。なんでもありますよ。」

店員の言うとおりちよつとした倉庫程の大きさの店内には様々な商品が所狭しと並べられていた。

スーパーやちよつとしたデパートより便利そうだ。

皆は店内をうろつき始めた。

「すごい！折るだけで光る棒だつて！」

皆初めてのPXに興奮気味だが紬は桁外れに興奮していた。

「ケミカルライトですね。お祭りの”光る棒”と同じですがこちらはそれより強力になっています。」

「これは!？」

「そちらは防水スプレーとなっております。結構強力で…」

「こっちは!？」

「そちらは簡単に剥がすことが出来る…」

店員を質問攻めした。

「ムギの奴嬉しそうだなー。」

「この布は？」

最後に紬が興味をしめしたのは大きな布だった。薄くて模様があつてどこかの民族衣装のようだ。

「シユマグですね。本来はアフガンストールと言うんですが。ほら、アフガニスタンに派遣された米兵がよく首に巻いてる奴ですよ。吸水性もいいですしおしゃれですし人気ですよ。」

「おすすめの色は？」

深緑、砂色、赤、3つの色がある。

「やはり戦闘服に合わせた深緑色が人気ですね。へたに派手な色の物を付けると目立って命取りですから。」

森林の中で砂色や赤じゃ目立つでしょう?と付け加えた。

「これ…いくらですか?」

「一枚2500円となっております。」

「6枚下さい!」

「ええっ?」「」「」

紬の行動に全員が固まった。

「ありがとうございます!」

更にシユマグとは別に様々な便利グッズを購入した紬であった。

「はい みんなお揃いだよ」

レジを済ませた絀が帰って来た。

「ムギ…。」

「もしかして違う色のほうが良かった？」

絀が少しうつむいたので梓は慌てて口を開いた。

「いや…！そう言うわけじゃくて！ただ…そんなに高「ムギちゃん  
ありがとう！これスツゴくかわいいよ！ギー太にも似合いそう！」

唯の興奮の声に梓の声はかき消された。

一瞬ムツとしたが唯が自分のギターを忘れてない且つ今でもしっかり可愛がっていることを知りなんだか嬉しかった。

「はっちゃんにも似合いそうだよ。」

「誰ですかはっちゃんって…。」

「唯の銃だよ。」

梓の疑問に唯の代わりに漣が答えた。梓は少し顎を摘んで考えた。

( 89式の8ではっちゃんなのか…。じゃあ私はやっくんって付けようかな…。8も9も入ってるし…。 )

すぐに”声に出てるぞ”と漣に言われ顔を真っ赤にした。

「いやー…。悪いじゃん？そんな高いもの。」

律が遠慮がちに言つと紬は目を瞑り優しい笑顔を作つた。

「いいの。お金使う事もないし…。それに、いつも思つてたの…。軽音部に入れてくれた事のお礼がしたいって。それにみんなで何かお揃いのものも欲しかったし。」

「……………ムギ(ちゃん)(先輩)(さん)…。……………」

皆が紬の謙虚な意見に感動した。

「……………ありがとうございます。……………」

「いえいえ。」

結局皆が受け取つた。皆それぞれシユマグを手にとり広げた。かなり薄くよく見ると向こう側が見える。

「見た目より軽いんだな。」

漣はそう言つさつそく着用例の書いてある貼り紙を見ながら首に巻いていく。

「いいさわり心地〜。」

唯は畳んだ状態のシユマグに顔をうずめうつとりしている。かなり軟らかいようだ。

「スカーフみたいでかっこいいな!」

律は顎の先を隠すようにシユマグを巻いた。

「こんな感じ?」

「梓ちゃん似合ってるよ。」

「憂も似合ってるよ。」

「ありがとうございます!紬さんも似合ってますよ!」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

全員がシユマグを巻き終え本来の目当てのお菓子やジュースも購入しPXを出た。

「ホームセンターとコンビニが合体したところみたいだったな!」

「うん。お菓子もいっぱいあったしまた行くこうね!」

「さー!娯楽室へレッツゴー!」

律が拳を突き上げた時

大きな爆発音が響き警報機が作動した。

「迫撃砲だあああああ！」

誰かが叫び10メートル程前の地面が爆発した。

「へ？わっ！えっ！？」

「バカ！早く穴（塹壕）に入るんだよ！」

律がパニックに陥った溼と唯の腕を掴み一番近い塹壕へ走った。掴まれた拍子に持っていた買物袋を唯が落としたが誰もが気にすることなく塹壕へ走った。腰の位置ほど塹壕に滑り込むように入り屈んだ。

ドーン！ドーン！と何回も爆発が起き悲鳴も聞こえた。

15、6回爆発がし攻撃が止まった。

恐る恐る顔を出した。

全員が言葉を失った。

「うわあああああ！！」

砲弾の破片が体中に突き刺さりのた打ち回る兵士。

「俺の足…。足…。」

自分の右足を探し這い回る兵士。

「衛生兵！誰か来てくれ！！ああクソツ！」

首から血が噴出する兵士の傷口押さえながら衛生兵を呼ぶ兵士。

「いた！大丈夫！？早く装備をつけて！」

葵が心配したように駆け寄って来た。だが誰も反応せず立ち尽くしている。

放心状態だ。

「しっかりしろ…！」

葵の渾身の怒鳴りにやっと我に帰った。

「私の小隊は警戒態勢に入る！すぐに装備を着けて北の塹壕に集合！」

「あ…はっ…はい！でもあの人達は！？」

梓は負傷者した兵士達を見て言った。

「負傷者は衛生兵に任せておけ！」

葵が去った後唯達は改めて実感した。

ここは戦場なんだ、と…。

死と隣り合わせなんだ、と。

## 日常（後書き）

感想、指摘、アドバイス  
お待ちしております。

## 初陣

装備を整えた唯達は指示通り北の塹壕に向かった。塹壕の北側には森が生い茂っていて視界を覆っている。

「デ、デルタ35>スリー・ファイブく（D中隊第3小队第5分隊所属の意味）到着しました！」

一応分隊長である澁が小隊長の葵に報告をする。

「ご苦労様。敵は多分まだ森の中にいる。警戒を怠らないで。」

葵は構えた89式小銃を動かすことなく答えた。

「り…了解。」

澁は戸惑い気味に了承し持ち場に戻った。

細長い塹壕内では細がミニミ軽機関銃の銃身を土嚢に据えたり他の者達も周りを見様見真似で89式小銃を森に向け警戒態勢に入っている。

「安全装置掛けっぱなしだぞ。しっかりしろ。」

そう言われ唯は慌ててセレクトレバーを安全装置の意味の”ア”から単発の”タ”に切り替えた。

「薬室に弾は？」

そう言われ慌ててボルトを引っ張って薬室に初弾を送り込む。

「慌てなくていい。だがな、しっかりしろ。そんなんじゃあすぐに戦死だぞ。」

ヘルメットの上からポンと軽く叩かれた。

「すみません…！すみません…！」

何度も謝りながら89式小銃を構えた。

「お姉ちゃん…。」

憂は心配そうに唯を見て狙撃眼鏡スコップを付けた89式小銃を構えた。

彼女は訓練所の時の射撃成績が抜群に良く選抜射手という狙撃手と歩兵の中間的ポジションを任されている。

「伏せろー！」

誰かが叫び訳も分からず頭を塹壕内に押し込んだ。

ドカン！と言う音が響き頭上から土と小石が降ってきた。

澁は思わず小さく悲鳴を上げた。

「敵だー！」律が少しだけ顔を出した。

そこには木と木の間からグレーの服を着込んだ武装集団が銃をぶっ放し基地目指して突っ込んで来るといっておぞましい光景が広がっていた。

《各自応戦！敵の侵入を許すな！》

それを合図のように自衛軍の反撃が開始された。塹壕から、櫓から、

機銃陣地から、装甲車から、ありとあらゆる場所からの銃弾が敵を撃ち倒していく。

透達は銃だけを塹壕から出し狙わず発砲した。無論当たるハズもなく銃弾は全て木や地面に吸い込まれていった。

カチ：カチカチ

弾切れになっても気づかずに引金を引き続けている。

ピシユッ

「ぐぎゃああああ！」

遂に自衛軍側に負傷者が出た。

先ほど唯に銃の指導をしていた男だ。

唯はすぐ隣からの叫び声にびっくりし小銃を落とした。

男は肩を撃ち抜かれていた。

その証拠に肩から血を流し男の肩の後の壁には血が霧吹きされたように付着している。

「こちらデルタ33！負傷者だ！至急衛生兵を送ってくれ！」

「うわああああ！これ俺の血かつ！？」

唯は落とした89式を拾い上げ弾倉が空になっている事に気がつき空の弾倉を落とし新しい弾倉を突き刺した。

「これで…薬室に初弾を…。」

そう呟きボルトを引っ張った。

ふと横を見ると遷達は銃を抱え涙を流し怯えている。

「お母さん……。お母さん……。」

「マ……マ……。」

「帰りたい……。もうやだ……。」

ある者は愛する家族を、ある者は願望を口にしながら震えている。

「唯！頭上げるな！」

しかし律は違った。

落ち着いた手付きで89式小銃を構え応戦している。

律を動かしているのはある目的だ。

### 訓練期間中

夜中律がトイレに行った帰り道。男子訓練兵用兵舎の前で2人の見張りの教官がパイプ椅子に腰を掛けながらなにやら話していた。

好奇心旺盛な律は迷うことなく兵舎の影へ移動し盗み聞きを実行したのであった。

『議会名誉勲章って知ってるか？』

『なんだそれ？』

『聞いた話によると兵士が貰える勲章の中で最高の部類に入るらし

くてな。例え二等兵が受賞しても將軍が先に敬礼しなきゃならんよ  
うな物らしい。』

話からしてそうとうな物らしい。

『それで?』

『そいつを取れば除隊申請が通るって話した。10人ぐらいは除隊  
できるんじゃないかねえか?』

『まさか…。』

影で聴いていた律は目を輝かせた。

『これだっ!』

その日から律は議会名譽勲章を授章するために努力してきた。訓練  
も勉強も今まで以上に力を注いだ。それさえ授章出来ればみんなを  
除隊にできると踏んだ。

照準器を敵に合わせ引金を引く。

銃口が小さく跳ね上がりその敵兵は首から血を噴き出しながら倒れ  
た。だが死んではいなかった。地面を背で這い左手で首の銃創(銃  
弾による傷)を押さえて右手で拳銃を引き抜きバックしながら撃つ  
てくる。また89式小銃を向け引金を引いた。銃弾はその敵の右頬  
をえぐり命を奪った。

不思議と実感はなかった。

ゲームと同じ感覚。

訓練所で息抜きとしてやっていたゲームと似ていた。「エーエイチ

（攻撃ヘリ）が来る！全員注意しろ！」

バタバタとローター音が聴こえた。律は塹壕に座り込み空を見た。細長い何かは2つ、舞っている。

AH-1S 戦闘ヘリ”コブラ”だ。

律と唯がその救世主に見とれだした瞬間。

機首のバルカン砲の銃身が回転をはじめた。ダララララと工事現場のドリルの音に近い音がしちょうど森から出て来ていた朝鮮兵の1人の首から上が消えた。

1人、また1人と倒れていく。

遂に敵は諦めたらしく体を反転させ森の中へ引き返していった。

「諦めたか…。」

無論その後コブラが追撃し司令部から敵部隊全滅の報が入った。

その晩

律は葵を訪ねた。

「どうしたの？」

「すみません。ちょっと相談が…。」

テント内に招かれ用意されたパイプ椅子に座った。

「はい。」

氷の入ったアイステイーが出された。

「あ、ありがとうございます。」

「で？相談って？」

葵は自分のアイステイーを煎れ律の真正面に腰を掛けた。

「あつ、えと、小隊長がはじめて戦闘した時ってどうでしたか？」

律が問うと葵は思い出すように目を瞑った。

「んー…。私はあなた達とは違って自ら軍に入ったんだけど…。やっぱり怖かったかな…。いくら訓練を積んでも怖いものは怖いんだよね。最初はずっと小銃を抱きしめて泣いてた。でもね？隣の人を撃たれたとき思ったの。”私がすっかりしないからこの人が死んだ”って。そんな思いは嫌だからね…。」

今一生懸命戦ってるんだ。と付け足し懐かしむような目をした。

「私…。今日確実に1人は殺したんですけど…。実感が無くて…。」  
俯き引金を引いた右の指を眺めた。

「それは至って正常な反応だね。」

「え？そんなんですか？」

「でもある時自己嫌悪に陥るかもしれないから気をつけて。」

「小隊長もあつたんですか？」

「うん。こう考えるようにしたの。”あの敵を殺す事で10人の仲間を救える”って。あながち間違いないでしょう？」

葵は苦笑し煙草をくわえ火を着けた。

「煙、大丈夫？」

「大丈夫です。」

「……吸う？」

「…遠慮しておきます。」

葵はしばらく煙草の煙を吐いたあとおもむろに口を開いた。

「さつき澁ちゃん達が訪ねて来たの。やはり最初の戦闘の事を聴いてきたわ。」

「あいつらいつの間…。」

「戦闘中かなり怖がっていたみたいで、それを悔やんでたわ。」

「……。」

「大変かもしれないけど明日からも頑張っ  
てね。」

「はい……。ありがとうございます。夜遅くに  
すいません。」

アイステイーを飲み干し葵のテントを後にした。

## 初陣（後書き）

感想、指摘、アドバイス  
お待ちしております

## 朝方

兵士が立っていた。

顔は見えない。体格からして男だ。

『迫撃砲だあああああ！』

兵士の足下で爆発が起き兵士が宙を舞った。  
下半身と上半身が切り離された。

『ぐぎやあああああ！！！』

ビチャビチャと血が顔に降りかかった。

「ふあっ!?!」

梓は弾かれるように起きた。

「夢。。」

額、首筋にじつとりと汗を掻き心拍数も上がっている。息も荒い。  
呼吸を整え時計を見た。

A・M・03:14

まだ陽も出ていない。

右側では濤が寝息を立て、左側ではここ最近放置され続けてきた楽

器がたたずんでいる。今は弾きたい気持ちにはなれなかった。テントの骨組みに掛けたボトルケースに入れたミネラルウォーターのペ  
ットボトルを抜き取った。  
空だった。

空ボトルをゴミ袋に放りタオルケットで首筋の汗を拭き取った。  
今の梓の服装は新しくおろした戦闘服のズボン（戦闘服は1人につ  
き2着支給）とTシャツという比較的ラフな格好だ。

靴下とブーツを履き台の上に置いてあつた財布を引き寄せ中身を確  
認した。

「6千8百円…。」

財布を閉じズボンのポケットにねじ込み立ち上がった。台の上の二  
つの髪よりのゴムが目に入った。

「髪は…いつか…。」

みんなよく寝ている…。

ひとりひとりの寝顔を見ながらテントの入口に向かった。

「あれ…?」

1人いない。

唯の隣のベッド。ここは確か憂のはずだ。ベッド決めをしたとき自  
分が隣の隣りを狙っていたように憂も唯の隣りを狙っていた。その  
姉思いの少女の姿はなかった。

（トイレかな…?）

「×\*# ￥う!!」

「ふぎやつ!？」

心臓が跳ね上がった気がした。慌てて振り返ると律がムニヤムニヤと寝言を呟いている。

(寝言:。)

とりあえず本来の目的を果たす為テントを出ることにした。入口の幕を開けると野外照明の眩い光に思わず目を瞑った。基地内には警備兵やジープが巡回し常に夜襲に備えている。ジープや警備兵、テントの中を縫うように進みPXを目指した。

「……」。あの時の事を思い出すだけで寒気がする。一歩間違えれば死んでいたはずだ。いつも軽く”死ぬ”なんて言う人々を見てきたが今日のような体験をすれば軽々しく”死”なんて言えなくなる。それほど怖かった。また敵が現れたらちゃんと戦えるか、なにより死なないか不安だ。梓は考えながら歩みを進めた。

「いらつしゃいませ。」

ドリンクコーナーから愛飲のミネラルウォーターを取り出しついでにサンドイッチも手にした。レジに立つと脇のラックから新聞が飛び出しているのが見えた。

「ありがとうございますー。」新聞も買った。普段は新聞なんか

買うことはなかったが世界情勢が変わった今、興味があった。

戻って新聞を読むのも皆に迷惑なので休息所に向かった。

プレハブの引戸を引くと折り畳み式の細長いテーブルとパイプ椅子が並び食堂を連想させる室内が見えた。

このテニスコート程の広さのプレハブには大型のクーラーが備えられていて7時〜11時は人でごった返しているが時間が時間なだけに誰もいなかった。

梓はその中の1つに腰を掛け購入した物をテーブルに広げる。

### 【大朝鮮連邦軍 日本上陸】

トップにそう記載された新聞を手を取った。非常時の所為かいつものそれより幾分重く感じた。

引き戸が開かれた。

梓は思わず入口を見た。

「あれ？梓ちゃん？」

憂だ。右手からはビニール袋がぶら下がっていた。

「あ、憂。」

梓は少し安心した表情を見せた。

「新聞買ったの？見せて見せて。」

彼女も梓と同じように興味が湧いたのだろうか。梓の隣に座り新聞を覗いた。

【ロシア、親米派と反米派の対立深まる】

【アメリカ、日本臨時首相と緊急会談】

1つ興味深いタイトルがあった。

【東京都核爆発、核弾頭ミサイルではない可能性】

2人は少し驚き憂が朗読し始めた

「臨時政府は東京都の核爆発をミサイルを使った物の可能性は低いという見方を示した…。理由は爆発発生前衛星からの映像に発射施設の動きは見られなかった事…。」

2人は驚いたがすぐに納得した。核弾頭ミサイルなら少なくともTVニュースで報じたり警告があるはずだ。

「じゃあどうやって…？置いていったとか？」

梓は自分の導き出した答えを言った。

「わからない…。でもそういうのって専門の人達が調べるから。そのうちわかるんじゃない？」

憂は考えてもしょうがないといった感じで新聞から目を離し自分のビニール袋からおにぎりを出し食べ始めた。

「そう言えば憂、どこ行ってたの？」

梓最大の疑問をぶつけた。

「え？トイレ行ってPX行ってたんだよ。PXって便利だよね。  
24時間開いてるし何でもあるし免税店だし！」

梓の予想は当たっていたみたいだ。

## 朝方（後書き）

次回から戦闘描写が増えると思われます

## 護衛任務 1

A・M05:00

朝焼けに照らされた駐車場をブーツ達が駆けていく。

「止まれ!」

片足で急ブレーキを掛けて止まり直立する。待ちかまえていた小隊長の葵は任務の説明を始めた。

「今回の任務は護衛だ。輸送隊と工兵隊からなる復興支援部隊が避難所に向かう。その護衛だ。そこら一帯は味方が制圧済みだが敗残兵によるゲリラ攻撃も否めないからな。我々は2台のWAPC(96式装輪装甲車)と1台のLAV(軽装甲機動車)に分乗して行く。」

96式装輪装甲車は1996年に自衛隊(当時)で採用された8輪のタイヤを持つ装輪装甲車(キャタピラを使わない)だ。

軽装甲機動車はジープを装甲で覆ったようなゴツゴツした外見の車両だ。

「根元曹長、君の隊は1号車、秋山軍曹の隊は2号車だ。私は最後のLAVから指揮を執る。」

「了解」

2両の96式装輪装甲車が大きな後部ハッチを開き待機している。

その後ろでは葵達が乗り込む軽装甲機動車が待機していた。

「分隊長と副分隊長は残れ、他は乗車開始。」

96式装輪装甲車は運転手と車長兼射手の2人の他に8名の兵士を積むことが出来る。唯達は次々と車内のシートを埋めていった。

残った漣と律は同じ任務に就く分隊長と副分隊長と向き合った。

「根元、この間入ってきた分隊長の秋山軍曹と田井中兵長だ。どうせお前の事だから挨拶してないんだろ？」

そう言われ口を開いたのはやつれ気味の男だ。

「ええ…。どうせ死んじまうんですからね…。無意味な事はしない主義なもんで。」

2人は背筋が凍った。先ほどまで朝日の逆光でよく見えなかったがこの男の目は野生の猛禽類のそれに近いものがあった。冷たく全てを見透かしているような目。

「シユウさん！」

副分隊長であろう青年が注意するように彼を呼んだが逆に彼に睨まれ黙った。

「任務に関係ないならもう行っていいですか？」

葵はしぶしぶ了承し根元は装甲車に向かって歩き出した。

「はあ…。彼はデルタ32分隊長の根元修造曹長だ。歳は27。あんな奴だがよろしくたのむ。」

少しあどけなさのこる優しい顔つきの兵士が敬礼した。

「デルタ32副分隊長の小椋龍一伍長です！19歳、よろしくお願  
いします！」

澁達も答礼する。

龍一は敬礼していた右手を降ろすと装甲車に乗り込んでいく修造の背を眺めながら語り出した。

「シユウさん…。前はあんなんじゃないやなかつたんですけど…。」

澁は車長兼射手席の隣にある分隊長席に座りヘッドセット型の無線機を付けた。

《本日はお忙しい中APC観光を御利用頂きまして誠にありがとうございます。本日電長兼バスガイドガールを務めさせて頂く長瀬智也軍曹です。》

銃座兼車長席から髭面の中年男の顔が現れたので皆が思わず笑った。

「……………よろしくお願いします……………」

唯はツボに入ったらしく思い出し笑いをしだした挙げ句咳き込むまで笑っていた。

《状況開始》

重たいエンジン音を響かせ車体が揺れ出した。

「澪ちゃん。避難所までどれくらいあるの？」

紬がヘルメットの位置を直しながら聞いた。

「一時間半ぐらいで着くよ。その前に基地に待機してる復興支援部隊と合流するけど。」

「結構遠いんだね…。」

「暑いね。」

唯がヘルメットを脱ぎ手で自分を扇いだ。

「この車両、ヒーターはあるけどクーラーがないんだよ。しかも籠もるからね。」

長瀬は説明した。

夏でただでさえ暑い上に四方全てを装甲で密閉されているので蒸し風呂状態だ。

「うわあ〜。水多めに持って来て良かった〜。」

40分後、基地で待機していた6台のトラックと42名の兵士から成る復興支援部隊と合流し避難所を目指した。

更に40分後

敵の襲撃も無く無事に避難所が見えてきた。

「見てみな。」

長瀬が車内に入り澁に今まで自分がいた席に来るように促した。その顔は至って真剣だ。

澁はそれに従い車長室に座った。

目の前にM2ブローニング重機関銃が黒く光り澁はその迫力に息を飲んだ。ふと道沿いに人々が列を成してる事に気がついた。

「あれ…？」

澁はあることに気がついた。

人々は澁達が来た方向に向かって歩いていく。それは避難所から彼らが来た事を表している。誰もが通り抜ける軍用車両の団を恨めしそうな目つきで見ている。

「なんですか？この人達…？」

澁は車内に戻り長瀬に聞いた。

「避難所に入れなかった人々だろう。避難所はもうスペースが無いからな。」

唯達も気になり天井にある四枚の上部ハッチを開き人々を目にした。

「……。」

悲しい気持ちになった。

紬は思った。

もしかしたら自分達は恵まれている方なのかもしれない。彼らは住む場所を失い、食事もままならない。自分達は自由はあまりないが衣食住が保証されている。

《そろそろ避難所に入る。下車準備しておけ。下車後は警戒を怠るな。敵はもちろん”民間人”にもな…。》

「え…?」

澪は自分の耳を疑った。自分の聞き違いだろうか。まさか自分達が護るべき避難民達を警戒するなんて事はないだろう。とりあえず聞き違いという事にしておいた。

避難所は倒壊しかけた校舎を持つ学校を利用したものだった。正門には機関銃陣地が置かれ校庭には避難民が使うテントが所狭しと並べられていた。

「了解しました…。みんな！降りて整列だつて。」

溲は膝に置いておいた89式小銃を背中に回しヘルメットを被り皆に降りるよう伝える。皆もそれに従いヘルメットを被り後部ハッチから降りた。降りた先は校舎裏の職員用駐車場で避難民の姿はなかった。

「整列！」

葵の号令で復興支援部隊と護衛部隊の兵士達が整列する。

「任務の説明を始める。」

任務の説明はどうかやら復興支援部隊の隊長がやるようだ。

「輸送と護衛は0730（マルナナサンマル）時から物資をあ貯蔵庫に運び込む。3号車の食料はすぐに配布する。0745（マルナナヨンゴ）時からだ。工兵は今から俺と来い。俺が直接指示する。では今から0730時まで輸送と護衛は待機だ。真木少尉、手続きを頼めるか。」

「了解しました。」

葵は答えた。

「では解散！各自警戒を怠るな！」

また”警戒”。

これは敵に対してなのだろうか

復興部隊の隊長は工兵達を引き連れて校舎内に入って行った。

「みんな！」

聞き覚えのある声が聞こえた。

振り返ると懐かしい赤い下淵の眼鏡をかけた少女がいた。

「和ちゃん!？」

「和！」

「和あ！」

「和ちゃん!!！」

皆驚いた。

まさかこんなところで再開するとは思わなかったからだ。

そして再開を喜んだ。唯と憂は和に抱き付きそれを喜びを表した。

「みんなも徴兵されたの？」

「うん。避難所できいきなり兵隊さんが『ついて来てー』って言うからついて行ったらこうなっちゃった。和ちゃんも？」

唯がため息混じりに説明し和に同じ質問を投げた。

「そ、私も似たようなものよ。やっぱり」知らない人について行っちゃイケません”ってあながち間違っていないわね。」

和のジョークにみんなが少し笑った。

「そっだねー。」

「あれ？和さんの武器って64式なんですか？」

憂が指摘するように和の背中には訓練所で使っていた64式小銃が居座っていた。

「いいわよ普段どおり”ちゃん”で、…私はCSだからこれなの。だから防弾ベストも支給されないの。」

和はY字サスペンダーと弾帯（サスペンダーに取り付けるベルト）のみで弾帯に弾倉を入れるポーチが複数あるだけだ。

「CSってなんです？」

梓が尋ねる。

「コンバット・サポート、戦闘支援部隊よ。そっちは何使ってるの？見たところ違っの使ってるみたいだけど？」

「89式小銃だよ。強化プラスチック製で64式に比べたら軽いけど、それでもまだ重たくって…。」

漣が説明し自分の89式を和に渡した。

「本当だ。少し軽いけど重いわね。唯はもう名前付けたの？」

和は唯を見透かしたように言った。

「うん！はっちゃんって言うんだ！よろしくね！」

「相変わらずね。唯達みたらなんかホツとしたわ。」

変わりない唯を見て和は安心したような笑みを浮かべた。

「そう言えば和、避難民にも警戒しろって言われたんだけど…。何か知ってる？」

洩が先程から疑問に思っている事を聞いた。

和は思い出すように語り出した。

「…私が配属されたその日、物資補給の為にここに来たの。トラック2台、護衛は16人で今回より小規模だったわ。最初の配給だったらしくて配給が始まった途端に人々が殺到したの…。5歳ぐらいかなあ…。女の子がお母さんとはぐれちゃったみたいで捜し歩いてたわ…。人って何かに夢中になると何も見えないのよね。その子トラックに群がる群集の中に入ってたの。群集の半ばパニック状態で、並ぶように促したんだけれど無視、兵士にも怪我人が出だしたから威嚇射撃までしたの。ようやく並んだんだけど。1人の女の子が子供を抱きながら泣いてたわ。血まみれの子を…。」

洩は肩を震わせた。

「その子供の顔よく見たら…。さっきの女の子だったの。」

和は何かを悔やむように言った。

「誰もが見て見ぬフリをしてた。その時思ったの。生きる為に必死な人間ってここまで醜いものなのかなあって…。」

「和…。」

律が同情したように彼女の名を口にした。

「その場で全員撃ち殺してやろうかと思ったわ…。」

和は自嘲気味に笑い最後に”最低よね”と付け足した。  
誰も何も言わなかった。

集合時間までただ沈黙だけの時間が続いた。

## 護衛任務1（後書き）

感想、指摘、誤字脱字指摘、疑問、アドバイス

お待ちしております。

## 護衛任務2

《しょ…食事が配られます！み、皆さん！い、い一列に並んで落ち着いて…！》

「まずはお前が落ち着け。」

朝礼台の上で慌てながらアナウンスする漣に律は小声でツッコミをいれた。もちろん本人には届かないが。

「漣も相変わらずね。」

「私達の（分）隊長さんなんだよー」

5分前

『作業止め。今から配給作業に移る！3号車移動開始！他は警戒に当たれ！愛沢！』

『愛沢は先日戦死しましたよ。』

『ああ…そうだったな…。真木少尉、少尉の部隊からアナウンスとして1人借りれるか？』

『ああ、それなら最高の人材がいますよ。』

葵が紹介したのはよりにもよって漣だった。

『エッ？』

『彼女、元軽音楽部ですからこれくらい楽勝ですよ。』

軽音楽部「人前で話すのは慣れている。と思ったらしい。」

『じゃあ頼むよ。』

慌てて拒否しようとする溇に拡声器が渡された。

『。。。』

他の誰かに渡そうかと思ったがみんなどこにも姿がない。

『さあ作業急げー。』

『ええー…？』

そして現在に至る。

「まさかあそこまで恥ずかしがり屋さんだとわね〜。」

葵は顔を真っ赤にしながらもじもじとしている溇を見た。

「案外溇で良かったのかも知れませんね。」

律は避難民を見た。並ぶ避難民の中には溇を優しい笑顔で見ている者もいた。母性本能でもくすぐられたのか。

10分後

澁の効果もあってかなんの問題も起きずに配給が終了した。

「なんで誰も助けしてくれないんだよ!!」

「だって〜面白いんだもん。」

「いやー、面白かつ」

バキッ!!

唯もからかったのにも関わらず鉄拳制裁が律の頭にだけ炸裂した。

「な…なんで…私だけ…?」

「小隊長。次は何をすれば?」

地面に突っ伏す律を尻目に澁は指示を仰いだ。

「ん?工兵隊が帰ってくるまで待機よ。避難民の人達と話でもしてきたら?」

澁はPXで買ったと思われるポーチから愛用のカメラを取り出し避難民の中に入って行った。

律と紬は澁の後を追いつ他のメンバーは早めの朝食(戦闘糧食)の準備を始めた。

「お姉ちゃん達兵隊さんなの?」

少女は老婆に抱かれながらいきなり歩く澁に質問をぶつけた。

「そうだよ。」

漣は立ち止まり優しく笑って答えた。

「若いのに大変ね。」

少女を抱く老婆が哀れむように言った。彼女は右目と顔の上半分を包帯で覆われていて包帯からは血が滲んでいた。

「鉄砲触らせてー。」

少女は好奇心から手を伸ばし律の背中の中の89式に触れようとする。触れるギリギリで律は少女と向き合う形でそれを阻止した。

「ゴメンね。鉄砲は触らせてあげられないんだ。危ないから。」

律がやんわりと断ると少女はムスツとしたが代わりに飴を貰い御満悦だ。

「すみません。お二人の写真撮らせてもらえますか？」

「え？別に構わないわよ？」

漣は2、3歩下がりがカメラを構えた。

「いきますよ。3・2・1。」

カシャツと音がなり2人の戦災者の姿が記録される。

「ありがとうございました。」

その後も漣は写真を撮り続けた。崩壊しかけた校舎、怪我をした避難民、どれも戦争の酷さを表すようなものばかりを撮り続けた。

「反戦写真集でも創る気かー？」

律が横から茶化す。

「ホラ、こういうのって忘れちゃいけないモノだろ？だから記録として残しておきたいんだ。」

漣は真面目に答えカメラを構え96式装輪装甲車に向けた。車上では乗員達が各々決めポーズを決める。

「漣ちゃんらしいわ。」

一枚撮り手を振りお礼をする。

「おっ、唯達だ。」

いつの間にか一周して来たようだ。向こうで唯が大きく手を振って漣達を呼んでいる。

「朝ご飯にしようよ！」

「おう ってクラッカーだけかよ…。」

唯、憂、梓、和が円形で座り中央にはバンダナの上にぶちまけられ山積みになったクラッカー。

(クラツカーもこれだけあるとなんかヤだな…。)

「しょうがないよ。これしかなかったんだし。朝ご飯っぽいの。」

「そつだぞ律。今は物資が不足してるんだ。食べられるだけありがたいと思わないと。」

「チエツ。」

皆小銃を肩に立てかけ輪に加わった。

「いただきまーす。」律はクラツカーをかじった。

ジャリッ

(こんな埃まみれの場所で準備したらこうなるよなー普通(泣))

「そつ言えば和さ。さわ子先生見なかった?」

漣は薄々行方が気になっている人物の名前を出した。

「同じ避難所だったけど…。徴兵されてるのしか見てないわ。訓練所は別だったけど…。」

「ねえねえ。さわちゃんが今の私達見たらなんて言うと思う?」

唯が何気ない質問を投げた。

「『迷彩服もいいっ!』とか言いそつじゃね?」

「言いそうですね…。」

律の答えに梓が苦笑する。

「……。」

「さわ子先生…元気にしてるかしら？」 紬はへびメタ出身で甘いものの好きの教師の顔を思い描いた。

「さわちゃんなら大丈夫だよ。あの人銃弾百発受けても核ミサイル受けても無傷そうだし。」

律は笑いながらそう言う。

「妖怪ですか…。」

みんな無性に彼女のムリヤリな感じが恋しく感じた。

16分後

「撤収準備はじめ！荷物を集める！ゴミ類は残すなよ！」

作業を終えた工兵隊が戻って来た事を合図に指示が出された。急いでクラツカーの入ってたビニールを集めバンドナをしまった。

「作業の終わった隊から乗車開始！」

漣達は撤収準備が周りに比べ遅めになってしまい慌てて装甲車に駆けていった。乗り込む直前に振り返り手を振り上げた。

「和ー無事でなー!」「和ちゃん帰ったら一緒にお茶しようねー!」

「元気でなー!」

「和ちゃんー!体に気をつけてねー!」

「みんなもね!」

和は嬉しそうに応えトラックの助手席に吸い込まれていった。

「さっきの、知り合いかい?」

車列が発射してすぐに長瀬は聞いた。

「はい。高校の友達です。」

漣が答える。和の無事も確認出来て上機嫌で表情も柔らかい。

「いいねえ青春だね。俺も昔の同僚とかあったけど…。どいつもこいつもデスクワークでよ。」

「長瀬さんは昔なにやってたんですか?」

「俺は徴兵される前は電気屋の売り場で働いてたんだ。結構有名な企業で…。コジィ…。」

そこで止まった。

漣は不審に思い彼を呼んでみた。

「長瀬さん？」

返事がない。

《敵だ！》

「え？」

突然の凶報に慌てて振り返る時に肘が長瀬の脚に当たった。

長瀬が糸の切れた操り人形のように車内に倒れた。

長瀬のヘルメットが床に当たる音が車内に響いた。

「ツー！！」

長瀬の被っているヘルメットは大きく削られそこから脳みそらしき  
ブヨブヨした物体が見える。

「うっ…ゲホッ！オエツゲホツゲホッ！…」

皆耐えきれずビチャビチャと胃の中身を吐き出してしまった。  
吐瀉物独特のツンとした臭いが車内に蔓延する。

ガタンッ

漣が倒れた。《各車！状況を知らせろ！》

「漣…ゲホッ！漣…？」

「う…ごめん…はあ…はあ…。力が…。ゲホッ」

顔は青白く染まり額には汗が滲んでいる。

《2号車！状況は！？》

《状況を知らせろ！怪我人は！？》

律は澪からヘッドセット無線を取り頭に付けた。

「な…長瀬軍曹と澪…秋山軍曹です！」

《どんな状態だ！？》

「な…長瀬軍曹は…戦死、秋山軍曹は貧血の模様。」

《了解…。田井中、しっかりするんだ。君が秋山に変わって2号車の指揮を執れ。誰かを重機（M2重機関銃）に付かせて応戦させるんだ。》

「り、了解…。」

無線交信が終わると律は水筒の中身を一気に飲み干し深く深呼吸した。

「唯！梓！澪を頼む！」

「ゲホ…！う、うん…！」

「わ…わかりました…ゲホッ」

「ムギと憂ちゃんは長瀬軍曹を後ろに引っ張って！」

「わかった！」

「わかりました！」

皆も水筒で口を洗い仕事に取りかかった。

律は1人射手席に立った。

中隊訓練での事を思い出しながらM2の側面にあるボルトを引っ張った。

「固ったあ…！」

ジャキ

なんとか口径程の大きさを持つ50口径弾を薬室に送り込んだ。

斜め前の台地に敵らしき人影が複数見えた。

灰色の迷彩服、手には自分達の持つものとは違う小銃。

朝鮮兵だ。

「RPGー！」

朝鮮兵の1人が構えた発射筒からツクシ型の弾頭が放たれた。

白い煙を吐き出しながら飛ぶ弾頭の先にはトラックがいた。

トラックは…

あの

律の脳裏に和の顔が浮かんだ瞬間。RPGはトラックの荷台に突き刺さると爆発した。

荷台からは辛うじて生き残った兵士達が転がり落ちてくる。

《4号車がやられた！繰り返す4号車だ！下車戦闘！怪我人を収容しろ！》

律の乗る96式装輪装甲車は4号車と敵の間に割り込んだ。

律はM2の上部にあるサイト（照準器）で大まかな狙いを付けた。

狙いが定まった瞬間。律は一気にトリガーを押し込んだ。

「うわあああああ！」

ズドドドと地を揺るがすような音が響き50口径弾が地を削っていく。

敵は怖じ気づいたのか台地の向こう側に隠れて攻撃してくる。

律がM2で敵を牽制している頃唯達は車内に漣と紬を残し負傷兵の収容作業を行っていた。

「大丈夫ですか!？」

「イテエよ…イテエ…」

「手が！私の手！」

どれもひどい状況だ。

ある者は顔面に破片を浴びまたある者は手を失っている。

彼らの肩を持ちまだ無事なトラックに乗せるといふ作業を行いながら和を探した。

「和ちゃん!?」

「うう。。。」

憂はトラックの助手席に頭から血を流し呻く和を見つけた。

「和ちゃん!和ちゃん!大丈夫!?!」

「う…:憂?」

和はRPG着弾時にヘルメットを被っていないかつたらしく頭を切っていた。憂は和の肩を支え何とか助手席から降ろす事に成功した。

「誰か来て下さい!!」

助けを求めたが他の負傷兵やその救助に当たっている者達の叫びと混ざってしまйнаかなか助けは来そうにない。梓と唯は負傷兵をトラックに積む作業に忙殺されていた。

和の右手を自分の首に掛け支えながらトラックまで運ぶ事にした。

一方律は未だに隠れて出てこない敵に苛立っていた。今は数発ずつ連射し敵を釘付けにする事が仕事になっている。

葵から無線が入った。

《近くを飛行中の空自のパトロールに支援を要請した。全員注意しろ!》

しばらくすると”ゴォーン…ゴォーン…”というエンジン音が聞こえて来た。

「来たぞ！」南の山の尾根から黒い航空機が姿を現した。

空自のAC-130Jだ。

この自衛軍誕生と同時に採用されたガンシップは米軍のC-130輸送機を砲や電子装備で武装させたAC-130、別名”空飛ぶ要塞”の日本仕様だ。

本来は輸送機であるため飛行能力は戦闘機や爆撃機、攻撃機に劣るこの機体が”空飛ぶ要塞”と恐れられる理由は多種多数の電子装備や大量の武器燃料を搭載出来るからだ。ターゲットを無力化するまで左回りで旋回し続けるその姿は味方からは頼もしき存在だがターゲットからすれば死神だ。

AC-130Jは敵の上空辺りでその大きな機体を傾け左回りで旋回を始めた。その迫力に律を含めた兵士達は圧倒される者は見られた。

音というよりは空気の波動に近い発射音を響かせAC-130J機体左側に付いている105mm砲が火を噴いた。もの凄いスピードで火の玉が落ちてくる。

105mm弾が台地の向こう側で炸裂し地を揺らし朝鮮兵達を消し炭に変えた。

銃声は歓声に変わり爆発はすぐに黒煙に変わり空に向かって登って

いく。

「よっしゃー！」

律は思わず拳を握り歓喜の声を上げた。

「やった！」

梓と唯も興奮し爆発を見ながら声を上げた。

周りの兵士達も小銃や拳を天に向かって突き上げハシャいだり”ざまあみる”と叫んでいた。

黒煙を見ているうちに3人はだんだんと落ち着きを取り戻し喜んだ事を後悔しだし罪悪感と自分に対する嫌悪感を感じ始めた。

（人が死んだんだよな…。なに喜んでるんだろ…。私…。）

律は握った拳をさすった。

**護衛任務2（後書き）**

感想、指摘、疑問、  
お待ちします

世界（前書き）

PVが16,000をこえました

＼（＾０＾）／

ありがとうございますー！

## 世界

あの護衛作戦から3日が過ぎた。

基地に帰投する途中から降り出した雨は今も降り続け一向にやむ気配を感じさせない。

唯達は1日の訓練を終わらせ自分達のテントにいた。彼女達はこういった自由時間や非番の日は支給品のTシャツと戦闘服のズボン、スニーカーと比較的にラフな姿で過ごしている。

「ピカピカ…。」

銃の分解整備は紬のちよつとしたブームらしい。折り畳みベッドの上でピカピカに磨きあげた部品を見てウツトリとしている。それを組み立てミニミ軽機関銃を形成し天井に向け構える。そして満足げな笑顔を浮かべる。

「あっがりー！」

「あーりっちゃんズルい〜。」

「何がだよ！」

「次唯先輩ですよ。」

「お姉ちゃん頑張ってる〜。」

律、唯、梓、憂はテント中央にあるテーブルを囲い大富豪やババ抜きを楽しんでいる。

「ムギちゃんもやろうよ〜。」

「うん！」

彼女達も基地での生活に馴染んできているようだ。

「そう言えば溇先輩は…?」

「さつき司令部に呼び出されて慌てて飛んでった。はいムギ。」

「大丈夫かしら…。あつ…。ババ引いちゃった…。」

「ムギちゃん言っちゃだめだよ。えーと…。あー、そう言えば和ちゃん大丈夫かな?」

「あのあとすぐに衛生科の人に引き渡したから大丈夫だと思うけど…。」

憂の言葉が終わると同時に溇が帰って来た。

「はあ。合羽着ててもびつしよりだよ。」

溇は不満を漏らしながら雨具用のポンチョを脱ぎ物テントの骨組みを物干し竿代わりにして干した。

「溇ちゃんおかえりー。」

「溇さんタオルどうぞ。」

「ありがとう。」

憂から受け取ったタオルで体を拭き湿っている上着を脱ぎTシャツ姿になる。すると皆を集め1人1人に司令部から渡されたと思しき二枚重ねのプリントを渡した。

「えーロシア軍に人民解放軍が敗走…。なんですか?これ。」

梓はきいた。

「今の世界情勢。世界は今2つの勢力に別れている…。」  
漣は話しだした。

まず世界が二分されている事、米、露、英、EU、日、印、豪等からなる連合国。中、朝、中東連合、さらにアフリカ諸国からなる枢軸国、もともと中国と交流が盛んだったアフリカ諸国と排米思想を掲げた中東連合は中国につくこと決めた。  
EUとロシアはすでに行動を開始しておりEUは中東とアフリカ、ロシアは中国に軍を送り込んでいる。もともと暴走しがちだった中国と大朝鮮を快く思っていないかったロシアはアメリカと手を組んでこの2つを叩き潰す気らしい。  
また中国海軍の東シナ海での活動が活発化してきている事や空軍基地の活発化から中国軍の日本侵攻も否めないものとなっている。

「第三次世界大戦かよ…。」

律は爪を噛んだ。

「大変なことになってるね…。」

紬達に先ほどの笑顔はなく深刻な表情を浮かべている。

「で、めくると日本の状況。」

東京は核爆発で23区は焦土と化している。おかげで政府とその場にいた総理大臣を始めとした政治家達は髪の毛一本残らず消えた。奇跡的に難を逃れた防衛大臣は防衛省、自衛軍幹部、将校を中心に構成した臨時政府を横須賀に置いた。核爆発による死者は現在陸自の化学部隊により調査中だが爆発時に被害者の殆どが蒸発してしま

つたらしく調査は難航していて正確な数はでていない。

戦況は東北関東では自衛軍優勢だが中部、関西の一部に敵の戦力が集結していて朝鮮軍優勢、さらに朝鮮軍が上陸ルートを取、島根に集中させ始め関西が敵の手に落ちるのは時間の問題らしい。九州地方は北部に自衛軍が戦力を集中させ朝鮮軍をなんとか防いでいて敵の侵攻は停滞している。

「まあ米軍の軍事介入も決まったし」

「アメリカ来るの!？」

唯が少し驚いたように言った。

他の者も驚いたような表情を浮かべている。

「ああ、来週の水曜には横須賀にMEU（合衆国海兵隊遠征隊）っていう海兵隊のエリート部隊が入る。すぐに陸海空軍も派遣するって。それから弾薬と燃料の給与もしてくれるらしい。」

「よっしゃー！アメリカー！フフフフフフフン　フフフフン  
ン　アメリカの国歌」

律が奏でだした鼻歌に唯と紬も便乗した。

アメリカの参戦

それは勝利を意味するものと唯達は考えていた。

突然サイレンが鳴り響いた。

このサイレンは緊急事態を示すものだ。

《D中隊は直ちに装備を整え1番掩体（格納庫）前に集合しろ。繰り返す。D中隊は装備を整え…。》

野外照明に括り付けられたスピーカーから呼び出しが聴こえる。

「はあ…。しゃーない！行くか！」

律はふっきれたように立ち上がり小銃を掴んだ。

「気張ってこー！」

唯も無理やりテンションを上げ拳を天井に向け突きあげた。

「おー！」

紬もそのマネをする。

他の者達も次々と装備を纏う。

（私も早くなれないとな…。一応私が分隊長なんだからしっかりしないと！）

雨はいつの間にか止んでいた。

1番掩体の前には6台の追加装甲型の高機動車が乱雑に停車していた。

ドアは開けっ放しでそこから待機していた兵士達が次々と車内の重傷者達を引っ張り出している。

まだ歩ける負傷者達は血に染まった茫然とした顔つきでフラフラと降りてまだ雨でグチャグチャの泥の上に座り込んだ。

「担架急げ！こつちだ！」

「コイツヤバいぞ！急げ！」

「もう大丈夫だからな！」

引つ張り出された負傷兵達は一度地面の上に並べられ衛生兵達のトリアージを受ける。

「赤はすぐに医務室へ運ぶ！そつち持つて！行くぞ！イチニの！サ  
ン！」

赤いタグが切られた者は今すぐに処置が必要な重傷な者で直ぐに軍医達が待機している医務室へ送られていく。

「傷口を押さえて！違つもつとしつかり強く！」

黄色を切られた者は赤ほどではないが早期な治療が必要な者。

緑は今すぐには治療が必要ない者や無傷の者が切られる。

黒は死亡、もしくは助からない者が切られそれを切る兵士は暗い顔つきになる。黒を切られた兵士は手の空いている兵士によってボデイバッグに入れられ霊安室に運ばれていく。

今回の赤黄緑黒の割合は2：5：2：1と言つたところだ。

「D3小隊はすぐに車両に乗り込め！A中隊が攻撃を受けている！  
応援に向かうぞ！」

漣達は苦しむ負傷者達を横目に今まで激戦を走り抜けてきた血まみれの高機動車の車内に入った。

世界（後書き）

感想、指摘等

お待ちしております

m ( ( m

## 市街地戦 1

唯が目を開けた時感じたのは爆竹が爆発したあのような臭いだった。視界には青空が広がっていてヘリと思しき機影が黒煙を纏い回転しながら通過した。

ふと視界が暗くなり誰かの顔で埋まった。その顔が梓の物だと気付くのに時間はかからなかった。

「い！」

酷い耳鳴りが邪魔をし梓の声は聞き取れなかった。だが必死だという事は目に溜まった涙と形相でうかがえた。

「ゆいせ…ばい！」

耳鳴りが収まり梓の声にかかっていたエコーが取り払われつつある。

「唯先輩！」

「へ！？」

マヌケな声を発し顔を上げる。

「大丈夫か！？ほら立たせるぞ！3、2、1！」  
漣も現れて2人に両肩を持たれ立たされた。ぼーっとする頭をヘルメットの上から叩き覚醒させる。振り向くと今までの記憶が戻って来た。自分は今までこの鉄くずと化した高機動車に乗っていて街中を移動中敵のRPG（対戦車ロケット）攻撃を受けた。

すべてを思い出し慌てて落ちていた89式小銃を拾い一番近い遮蔽物になりそうなコンビニの影に隠れた。敵はコンビニの右向かいにあるアパートから攻撃を仕掛けてきている。

澪は梓の背中の中の無線機の受話器を引っ張り出し小隊長の葵に連絡をくれた。

「こちらデルタ35！5号車がやられました！K I A（戦死者）1名！運転手の…。澪は少し黙った後”あぁもう”と漏らし受話器を放り運転席まで全力疾走した。車体を盾にし戦死者の身元を確認する。ハンドルに持たれている遺体の首に掛かっている認識票を引きちぎって”Name”の項目を梓に知らせた。

「野崎千恵美上等兵です！指示を！」

梓はそれを中継し受話器の向こうの葵に告げた。

その運転手は自分達と同年代で彼女も徴兵されたと車内で言っていた。笑顔が可愛い少女で澪達も好感を持たたが今となってはガラスや砲弾の破片に顔や首をスタスタに切り裂かれ見る影も無い。澪は認識票を弾帯に付けたポーチに突っ込みコンビニの影に向かって走った。

《デルタ31了解！ここじゃ危険すぎる！車両部隊は直ちにポイントCに前進しろ！<sup>チャーリー</sup>デルタ35！君達はなんとか徒歩でポイントCまで向かってくれ！そこで落ち合おう！》

「デ、デルタ35了解…！」

梓は戸惑い気味にそう言い受話器を戻し気を引き締めるように両頬を叩き戻って来た澪に知らせる。やはり澪もかなり困った表情を浮

かべた。

5両の高機動車から成る車両部隊は車載機銃で応戦しながらも凄まじい数の銃弾やRPGから逃げるようにスピードを上げ走りさって行った。

「行くぞ！」

漣達は敵の攻撃から逃れるため住宅街へと続く道へと入った。

「ポイントCはこの住宅街を抜けたところにあるガソリンスタンドだ。」

住宅街には敵の姿は見えず銃声や爆発音は遠くの方から聴こえるだけだ。だが連なる家屋は戦火の被害を受けボロボロだ。

「もったいねー。」

律は砲撃か何かしらで屋根や壁に穴を作った家屋達を見て言った。足下のコンクリート製の道路にはキャタピラの跡が黒く残っていて潰れた高級車の上を通りずっと先へと続いている。

漣はせっかくマイホームを買ったのに戦争で吹き飛ばされた哀れな会社員の人生を想像するとかわいそすぎて涙がでそうだった。

一方家屋から興味を失った律と唯は敵の出現の警戒に移っていた。あちらこちらに敵味方の死体が転がっているため敵の現れる確率は低い絶対ではない。漣達も警戒に移り住宅街を進んでいく。

歩みを進めるたびに銃声が近くなる。

突然右側の家の壁が大きな音を立て崩壊した。そこから朝鮮軍の装甲車が姿を現した。

「敵だ！」

漣達はすぐに放置車両の影に身を隠した。その装甲車の外見を漣は脳内のデータと照合を開始した。情報科から渡された敵車両に関する書類に記載されていたBTR兵員輸送車と一致した。

BTRは瓦礫を踏み潰し車道に進入した。幸い漣達に気づいていないらしく道を闊歩していく。

「装甲車を撃つな。こつちに勝ち目はない。幸いこつちに気付いてないから裏庭を通って行こう。」

漣はいつになく冷静な態度で提案した。

「ポイントまであと少しなのに……！」

律は悔しそくに顔をしかめ漣について行った。

柵を乗り越え裏庭を進んでいく。唯は柵を乗り越えるたびに不安が大きくなっていくのを感じていた。先程運転手の死体を目にしてから心のどこかで”次は自分の番だ”という思いがあった。

漣が横をチラリと見ると家屋と家屋の隙間からBTRが唯達と平行して進んでいくのが見えた。

やはり裏庭を進むのは正解だったがなぜあんな的確な判断が一瞬のウチに出せたのか自分でも不思議だった。だがそれ以上にこの状況下で取り乱さずにいれる自分がいる事が不思議でなにより不安だっ

た。もしかしたら戦場が自分の居場所となっている気がした。

ダツッ！という音が二回聴こえ何かが弾けるような音がした。溇がすぐにハンドサインで”待機”の合図を出し全員がしゃがみそれぞれがそれぞれ担当する方向に銃口を向け警戒する。

「マズいな…。あの装甲車このまま進むとポイントに…。」

「LAM（110mm個人携帯対戦車弾）が航空支援でもあれば…。」

「こちらデルタ35、住宅街をポイントチャーリーに向けて進むBTRを確認。多分車内に10名はいるかと、注意してください。」

《こちらデルタ31。了解。》

葵の声に悲鳴が被って切れた。

向こうは相当な修羅場の中らしい。溇はハンドサインを出し前進を再開した。

その頃デルタ32の根元修造は2号車の後部座席で苛立っていた。道の隅に民間人と思しき屍の山が積み重なっていた。その大半は朝鮮兵達による反抗的民間人の粛清によるものだ。このような惨劇の跡は自衛軍の兵士達の怒りと殺意を煽るだけでなんのメリットもないことを奴らは知っているのか？修造はそう考えていた。

ふと前方の路地から敵の一個分隊が出てくるのが見えた。そのうちの1人はRPGを所持していた。

「10時方向！敵一個分隊！」射手は屋根に備え付けられた50口径重機関銃M2を指示された方向に連射し大鎌を振ったようにその分隊をなぎ倒した。ちょうどそれと同時に。車両左側を撃っていた山岡という小銃手が鮮血をぶちまけ修造の膝の上に倒れた。

「カツカハ …！」

喉から噴き出す血を止めようと両手でとっさに押さえ唸っていた。修造は助手席にいた自分に代わって小椋龍一伍長に右側をカバーするように命じた。すぐにタオルを山岡の傷口にあて強く押さえた。ポイントチャイリーには歩兵の他に衛生兵も展開しているはずだ。血の気が引いていく山岡の顔を見て別行動中のデルタ35が脳内に浮かんだ。

（そーいやあのがき共…、うまくやってるのか？）

それを知る術は今のところは見あたらなかった。

漣達は住宅街の一番ハジにある家屋に入った。壁に穴が空いた木造建築を土足で入っていく。

中には生活の面影が残っていた。カビたカレーらしき物、ウサギのぬいぐるみ。傷んだテーブル、それら全ては血で汚されていた。

それらが悲しくて、ただ無性に悲しくて涙が出てきた。

だが外からの銃声で我に帰り気を引き締め二階に上がり角部屋に入った。

ここからポイントチャーリーであるスーパーマーケットが見える。だがそこまで行くにはその手前に展開しスーパーマーケットの駐車スペースに展開している自衛軍部隊に攻撃を加えている部隊を抜かなければならない。BTRが1台に歩兵が30名前後。チャーリーに展開する部隊はいずれも対戦車火器を使い果たしたらしく通りには破壊された車両が散乱していた。つまりBTRに対抗する術はない。

「どつする？」

唯は聞いた。

遷は少し考えてある事に気がついた。

「律と憂ちゃんは…？」

律と憂がない

「あれ？憂？」

「りつちゃん？」

本人達は住宅街の通りである物を探していた。死体を持っているのは小銃や拳銃ばかりで目当ての物は見当たらない。敵を警戒しながらの作業なのでテンポは悪かった。

不意に庭に焦げた96式装輪装甲車止まっているのが目に入った。

高級住宅に軍用装甲車、そのミスマッチな風景が面白く感じた。

「うっ。う」

中は半ば炭化したような死体が5体あり肉と服の繊維が焼けた後の表現しにくい臭いが充満していた。車体後部右側には小さな穴が空いていた。おそらくRPGの攻撃によるものだろう。鼻をつまみ中に入ると分隊長席の横に目当ての筒が立ってかけてあるのが見えた。憂の中にあつた死体に対する恐怖心は一切消えその110mm個人携帯対戦車弾、通称LAMを確保した事が嬉しかった。これで自分も姉やみんなの役に立てた気がしたからだ。

憂は律に知らせようとLAMの発射筒に付いたストラップを首から掛け外に出た。

ちょうど出た時、家屋の壁から1人の朝鮮兵が出てくるのが見えた。距離にしたら5メートル、かなり近い。

向こうも憂の視線に気づき憂を見た。

憂は89式小銃を構えた。

目があった。

一瞬引金に掛けた指が凍り付いた。

その朝鮮兵はまだ子供だったのだ。

自分と同じ年ぐらいか。相手も驚いた表情をしたがすぐに小銃を憂に向けた。

タタン

2発の銃声が鳴り1つの体が倒れた。

ソ・サンウ一等兵は釜山郊外の出身の15歳の少年兵だった。韓国政府や軍部隊が日本に逃げ延びたと聞いた時は酷く失望し人民軍に志願した。日本に来たときこれは日本を解放するための戦いだと言導者に教えられそれを信じてやまなかった。だが実際ここで行われていたのは解放どころか戦争でもない、ただの残虐行為だと気付いた時はあの時の失望感の数十倍のそれを味わった。男は殺され女は犯されてから殺された。死体を焼く臭いや悲鳴が頭から離れず寝不足の日が続いた。これでは国に帰って誇れる事なんか何もない。そう考えながらもなにもせず銃を持ち今日が来た。

敵1人でも殺せればいい、そう思った矢先に現れたのがこの少女兵だった。ヘルメットに隠され顔はよく見えなかったがなんとなく少女だと感じた。日本もこんな子供を兵士にするのか、少し驚いた。サンウには彼女は酷く怯えているように見えた。だが彼女の胸元にはしっかりと小銃が居座りサンウも対抗してK2小銃を構え引金を引いた。

タタン

倒れたのは朝鮮兵だった。彼は撃たれた衝撃で見当違いの方向に撃った。

「大丈夫？」

倒れた朝鮮兵から少し離れた所に律が小銃を構えていた。

「律さん…。」

「敵を見つけたらすぐに撃つ！そうしないと殺られるぞ？」

律は憂に近づきながら言った。

「すみません…。ありがとうございます。」

律は朝鮮兵のK2を蹴り飛ばした。

「さ、漣達が心配してるだろうから行こ！お土産見せてびっくりさせてやるっぜ！」

「はい！」

2人は漣達のいる家屋に戻って行った。

一階から細の律と憂を呼ぶ声を聴いた時漣は安堵した。ドタドタと3つのブーツ独特の足音が聴こえやがて3人が戻って来た。

「どこに行ってたんだ？…って、どこから持ってきたの？」

「憂ちゃんが見つけた！」

「下のWAPCの残骸から持ってきました！装甲車は大破してましたがLAMは奇跡的に無事でした！状況は！？」

憂は答え質問した。

「車両部隊はポイントチャージャーに入ったけど装甲車と敵の攻撃を受けてる。それで装甲車を破壊して一気に攻撃をしよう。」

紬と梓と唯に隣の部屋に移動するように命じた。この部屋から全員攻撃するのはスペースがなかったからだ。

「てか勝手にいなくなるなよ。心配するだろ？」

「悪い悪い。」

「ごめんなさい。」

律は訓練での過程を思い出しながらLAMの弾頭先端部分のプロブと呼ばれる信管を伸長させた。こうする事で対戦車榴弾となる。プロブを縮めたままだと榴弾としては使用出来るが榴弾だと装甲車両を破壊する事は出来ない。

その作業を済ませ律は照準をBTRに合わせた。

「発射準備よし！」

LAMは発射時に発射時の反動を相殺するために後方にカウンターマスと呼ばれる重量物質を放出する、この方式は従来の爆風を放出するタイプの無反動砲に比べ危険を及ぼしにくいが憂は一応後方を確認した。

「クリア！」

映画の受け折りにから憂は叫び律のヘルメットを軽く叩いた。

それを合図に引金を引いた。

バシユツという音を鳴らし発射筒から切り離された弾頭はまっすぐ

BTRへ向かった。

BTRの影からチャーリーに向けて射撃していた朝鮮兵が溇達の存在に気が付いた。

「（対戦車…！）」

彼の叫びが終わる前にBTRの車体で形成炸薬が爆発しBTR自体を破壊、さらにその破片と爆風が彼を含めた周りの朝鮮兵をズタズタに切り裂き焼いた。

BTRが黒こげになり一瞬朝鮮兵達が停止した。それを見逃さなかった紬はミニミ分隊支援火器を連射した。溇達も通りの朝鮮兵達に向って撃った。

前後からの攻撃に朝鮮兵達は倒れていく。

《こちらデルタ31！35！チャーリー向かいの民家からBTRを吹き飛ばしたのはそちらか？》

「はい！」

溇は短く答えた。

主力のBTRを破壊された朝鮮兵達は慌てて後退しある者は銃を捨て投降した。

「動くな！」

溇達が通りに出ると投降した朝鮮兵の拘束が行われていた。プラスチック製の拘束具で両手を固定し待機していたトラックの前に乱暴

に座らせられる。

「D3小隊集合！」

向こうからそんな声が聴こえたのでそちらへ向けて走った。

高機動車の車列を背景に第3小隊の兵士達が集まっている。

「これから弾薬、燃料の補給を済ませC4地区に取り残されている部隊の救援に向かう。SAM（地对空ミサイル）の存在が確認されるからヘリは出せない。そこで私達がC2地区に展開しているSAMを撃破しヘリチームを要請する。攻撃ヘリの援護を受け市内から敵を一掃する。わかったか？」

全員が頷き補給部隊が陣取っているトラック群に向かった。

カチカチと音を立て空弾倉に5.56mm普通弾を入れていく。水筒にミネラルウォーターを入れスナック菓子やチョコを口に放り込む。疲れた体に甘いものはありがたかった。皆、自然と表情がやわらかくなっていった。

「秋山軍曹、君の分隊は4号車に乗ってくれ。」

「あ、はい。」

漣は長い髪を結び直しながら返事をした。

「一応持つて行くか…。」

漣は木箱に入れられたSAMを見て呟いた。SAMの破壊はC4)

高性能プラスチック爆薬）や他の分隊のLAMで行うが一応自分達も持って行くべきだと思った。近くにいた補給部隊の兵士に声をかけ木箱からそれを取り出しストラップを肩に掛けた。

助手席には漣、後部座席には律と唯、荷台には梓と憂が、銃座には紬が付いた。運転手は平川拓也という20代の伍長だった。社交的ではないがどこにでもいそうなタイプだ。

高機動車が5台に歩兵32名が分乗していく。第3小隊の元々の人員は42名なので死傷者を10名出した事になる。

銃座からの景色を見て紬は今更ながらここが日本なのかを疑った。

## 市街地戦1（後書き）

感想、指摘、アドバイス  
お待ちしております。

## 市街地戦2（前書き）

最近クオリティとか全体的な物が低下してる気がします+  
+ ;

## 市街地戦2

紬は街の小さな診療所に連続して50口径弾を撃った。

50口径機関銃の射撃訓練で優秀な成績を収めた紬にとって100メートル先で”撃つてくれ”と言っているのを銃創まみれにするのは簡単だが動き回り更に攻撃を加えてくる意志を持った的に命中させるのは難しかった。

自分の乗っている高機動車の屋根に火花が散る度に機銃の引金を握んだ手を離し体を縮めた。だがそれが4、5回続くとこのままではダメだと悟り”自分が担当しているのはこの場で最大の威力を持つ銃だ”と自分に言い聞かせた。すぐに実行に移した。

その姿と外の様子を見た唯は娯楽室で見たソマリアでの米軍の作戦を描いたある映画を連想した。

「RPG！」

漣が右側を指差し叫んだ。平川はすぐにハンドルを小さくきり回避行動をとり律がそれを窓から銃身を飛び出させ撃った。

だがそれは小銃手の肩を掠めただけでRPGは発射された。

弾頭は車体スレスレの位置を通過し漣達の肝をこれまで以上に冷やした。紬はそれを見逃すと今度はアパートの通路から身を乗り出す朝鮮兵を見つけ撃ちまくった。朝鮮兵達は胃袋の中で手榴弾が爆発したように腹部を破裂させポトポトと道端に落下していく。

気付くとM2の銃身は目玉焼きが焼けそうな程の熱を持っていた。

その頃先頭を走っていた1号車に乗る葵は嫌な予感で頭がいつぱいだった。89式小銃に新たな弾倉を差し込み前を見た時嫌な予感が的中した事がわかった。

「戦車です少尉！」

目の前の曲がり角から大朝鮮連邦の主力戦車（MBT）99式戦車が壁に突進し車両部隊の行く手を阻んだ。その後ろから護衛の歩兵共が蟻のように湧いてきては50口径弾にズタズタにされた。

「戦車に付けて下さい！」

誰だ？葵は後ろを見た。射手の飯塚という男だった。運転手は葵に指示を求めた。

「やって。」

運転手は少し戸惑ったが直にアクセルを踏んだ。考える暇はなかった。彼に何か策があるならそれに縋りたかった。

戦車の砲塔がギリギリと回転を始めた頃飯塚は高機の屋根から戦車の車体に飛び移った。

右手には9mm拳銃、左手には手榴弾が握られ小指にも手榴弾が引っかけかかっていた。

何とか砲塔によじ登った。葵はそれを食い入るように見た。

自分の周りに朝鮮兵がないことを確認する手榴弾の一つのピンを歯で引き抜いた。安全レバーを外さないように軽く握りながらハッチの上で地団駄を踏んだ。

なるほど

葵は思った。

異変に気がついた乗員がハッチを開けた。

「よう。」

そう言つて乗員の顔面に蹴りをお見舞いし胸に9mm弾を叩き込む。抗弾ベストで対したダメージはないが怯ませるのには充分だ。その隙にハッチに手榴弾を投げ込みもう一つも投げた。

痛みに呻く乗員の横顔に蹴りをいれた。ベキヤツという嫌な音がし乗員は力なく車内に消えた。急いでハッチを閉め高機の屋根に飛び移った。その直後戦車が小さく振動し砲塔の回転が止まった。

「相手がバカで助かったなあ！よくやった！」

誰かが叫んだ。

「悪知恵なら負けませんよ！」

飯塚はそう叫び銃座に戻った。

《こちら1号車、これより引き返し別ルートを使う。》

直に反対車線を1号車が通過し2号車3号車と続いた。紬の位置から戦車の破壊劇がはつきり見えた。砲塔内の制御装置は破壊され生き残った操縦士はおそらく車内であたふたしているのだろう。

全車が反対車線に移った頃50口径機関銃の銃身の熱は完全に冷めていた。紬は朝鮮兵が見えない事を確認し機関銃の側面に付けてある弾薬箱の蓋を開けて残弾を確認した。場合によっては装填の必要があった。だがその必要はなかった。弾薬箱の中にはまだ半分以上残っていた。

助手席に座る漣の位置から朝鮮兵の頭がスイカよろしく破裂したのが見えた。赤い血と黄色とピンクの混じった奇妙な色の液体がヘルメット内ではじけた。自己防衛から反射的に視線をそらした。

《1号車から全車両へ、車両部隊はA2小隊を後送しろ。D3小隊はA2小隊を引き継ぐ。》

漣は車載無線機の受話器を取り短く返事をした。

「了解。」

それを車内の全員に伝えた。

全員が頷いた。

じきにA2小隊が崩壊しかけた喫茶店から出てくるのが見えた。

《下車！》

それを合図に降りた。紬は屋根に上がりボンネットを踏みつけてから地に足をつけた。

店内からA中隊第2小隊の指揮官らしき男が出てきた。

「救援感謝します！！」

「状況は！？」

銃声が凄まじくお互いの耳元で叫び合っていた。

「SAMの護りは軽歩兵が1個小隊！BTRが2台！15名のWIA（戦傷者）と2名のKIA（戦死者）が出ました！」

「わかりました！行ってください！」

A2小隊のどの分隊にも負傷者がいた。我先にと車両に乗り込み死傷者は荷台部に積まれていく。

唯は喫茶店内を見回した。踏みつけられた雑誌に割れた食器、所々血で濡れたボックス席、割れた電灯、溲が隅から店内を写した時のフラッシュが一瞬店内を明るくした。壁の穴からグラウンドが見えた。ただのグラウンドではない。中心にSAMが居座りその周りを土囊や塹壕が覆った対空陣地だ。そこを歩兵やBTRが動き回っている。

「LAMを持つてる分隊は？」

3つの手が上がった。そのうちの1つは律のものだ。

「31、33、35ね…。じゃあ31は右のBTR、33はもう一方の、35はSAMを潰して。31、33がBTR破壊後に一気に仕掛ける。35と32は店の裏側から行って」

葵は裏口へと続くであろう”STAFF ONLY”の扉を指差した。

「行くぞ！」

葵がそう言うと各分隊が一斉に行動を開始した。唯は先頭を歩き扉を蹴り破った。

唯はこの場の誰よりも興奮していた。戦闘が始まった時から続いていたこの興奮は一種の脳内麻薬のようなものを分泌するほどだった。厨房を抜けると裏口が見えた。だがそれが勝手に開き一個分隊程の朝鮮兵達が見えた。タバコをくわえのんきに談笑していた。目があった。

1人が口からタバコを落とし銃を構えようとした時、唯は引金をがむしゃらに引いた。

パンパン、と単発だがそれでも早い速度で弾が撃ち出され朝鮮兵達に突き刺さった。他の兵士たちも射撃を開始しあっという間に朝鮮兵達は葬られた。

ほとんどが即死だったがまだ息の有るものもいた。唯が最初に仕留めた朝鮮兵もその1人だった。

唯が撃った兵士はヒューヒューと音をたて全力で息をしていた。

唯はその顔を見た。  
ギョロリと血走った目がこちらに向けられた。  
その目と自分の目があった

その瞬間

唯は何か呪いをかけられた錯覚に陥った。その呪いは一気に唯の中に押し留められていた罪悪感を引き出させた。今までの朝鮮兵ひとりひとりの顔がフラツシユバックした。今までの興奮が一気に冷め小銃を握っていた手の力が抜けていく。手から肩へ、肩から全身へと力が抜けていく。

「う…、あ…」

力無く座り込んでしまった。ステンレス製の調理台に背をぶつけ大きな音を響かせた。

「お姉ちゃん！」

「撃たれたのか!？」

澁達が心配して駆け寄って来た。デルタ32の衛生兵も慌てて駆け寄って来た。

「……………」

修造は唯が撃たれたわけではない事を知っていたので1人で息のある朝鮮兵にトドメをさして回った。楽に死ねるよう眉間やこめかみに銃口を押し付け引金を引く。

「唯!? 唯!」

「おい、しつかりしろ」

修造は唯の正面にしゃがみ込んだ。

「いいか？みんな殺すのも殺されるのも怖いんだ。俺達はコイツら（朝鮮兵）に個人的な怨みなんてない。クソつたれのジジイ共がやれつつうから殺す。それが戦争だ。それで罪悪感を感じるか感じないかはお前の自由だ。だがな、罪悪感人は人を鈍らせる。その際にお前が撃ち損ねた奴が秋山を撃ち殺すかもしれないんだ。考える」

「は…はい…」

唯が返事をする。修造は立ち上がった。

「仲間を死なせたくなかったらシャキツとしろ。いいな？」

落ちていた唯の89式を本人に渡した。

「はい！」

唯は立ち上がりそれを受け取りスリング肩に掛けた。

（な、なんで…私…？）

透は自分の不幸キャラを呪った。

裏口から出るとちょうどグラウンドに沿って走る国道に出た。

「こちらデルタ32、準備よし」

放置バスの影で修造は合図を出した。

《デルタ31了解、やれ》

すぐに爆発音が聴こえ銃声が連発した。対空陣地の朝鮮兵達の注意が一齐にそちらに向いた。

「よし！」

律がLAMを持ちバスから飛び出そうとし澁達も続こうとした。

「待て！」

それを修造は制止した。

「砲兵隊の支援が得られる事になった。レーザー照準器でSAMをマークしろとのことだ！松戸、お前レーザー持ってたよな？」

修造は部下の松戸という男に聞いた。

「はい！奴らが正面に気を取られてるウチにやってきますよ」

松戸がバスから飛び出し89式に付いたレーザー照準器をSAMに向けた。

ズダダダダ！

レーザー照準器は音はしないはずだ。不審に感じた澁が恐る恐る顔を出して様子を見た。松戸は地面に突っ伏してた。彼の周囲の地面が赤い、そして肝心なレーザー照準器は、



唯は目を覚ました。どうやら気を失っていたようだ。

「ゲホツ！ウエホツ！」

唯はせき込みながら起きあがると服や体に着いた埃を払った。

「あー死ぬかと思ったー…」

「ゲホツ！ゲホツ！ゲホツ！」

煙が晴れその中から次々と顔が出てくる。

どうやら全員無事のようにだ。

「そついえばSAMは!？」

律が聞いた。

「砲兵が潰したらしい。俺達の任務は終わりだ…」

修造は燃えるSAMを見て呟くように答えた。

「あ…」

どうやら気を失っているウチに対空陣地の制圧は済んでしまっていたようだ。

「私達…何のためにここまで来たのかなあ…?」

透は悔しさと悲しみの入り混じった声でそう言った。

「最初からこうすればよかったのに……」

憂はこの作戦で死傷した兵士達を想いながら呟いた。

「……」

皆、ただ悔しかった。ここまで来たなら自分達の手でSAMを潰したかった。その役割を安全圏から砲撃する砲兵隊に奪われた。それが無性に悔しかった。

《街を制圧、回収用のへりを要請する。到着は…5分後!》

「私、ちょっと歩いてくる……」

唯は瓦礫の上に登って消えていった。

「心配だから私行ってくる」

「私も行きます!」

律と梓も瓦礫の向こうに消えていった。

市街地戦2（後書き）

感想 指摘

お待ちしております

唯は軽音部の部室である音楽準備室の前に立っていた。頭に重たいヘルメットの姿はなく服装は懐かしい学校の夏期よりの制服だった。びっくりしたがとりあえず扉を開けることにした

「唯先輩！」

「マドレーヌ持ってきたからあとで食べようね」

「遅いぞ唯」

「澪が怒ったー！」

部室内にはそれぞれの楽器を持ったみんながいた。彼女達もやはり制服で懐かしい軽音部の姿だ  
今までの戦争が自分の頭の中だけで起きていた妄想の産物だと思えるほど、普段の光景だった

「みんな！？戦争は！？」

「戦争？ここは日本だけ？戦争なんかあるわけないじゃん」

律が答えた

途端に唯はあの戦争が夢だと確信した

「あずにゃん！」

唯は迷わず梓に抱き付いた。その瞬間梓は煙のように崩れて消えてしまった。梓がいたという形跡すらない

「え！？」

「どうしたの？唯ちゃん」

唯は紬を見た

「ムギちゃん！あずにゃんが！」

そのとき、紬も煙が風に流された時のように消えてしまった

「ムギちゃん！？」

「唯」

「澪ちゃ」

澪も同じように消えた

「え…あ…！？」

「唯！」

律に呼ばれ律を見た。目が合うと彼女は場違いな笑顔でニッコリと笑った

「りつちゃん？みんな…」

だが律も風に流されていった

「りつちゃ…！？…え？」そして音楽準備室の景色が煙のように消え代わりに荒廃した都市の景色が現れた

消えたみんなを探そうと足を上げた。だが何かに足が引っかかり転



思わず  
叫んだ。

唯があまりに辛そうになされているので遷達は心配で眠れなかった

「ん…くう…あ…」

「お姉ちゃん…」

憂は唯の手を握った。

酷く汗で濡れていた。額は汗でじっとりとし息もあらい

今までにないほど苦しむ姉を見て胸がヒドく痛んだ。

「ごめんなさい…！ごめんなさい…！ごめんなさい…！ごめんなさい…！ごめんなさい…！」

タオルケットを抱きしめ謝りだした。周りで見えていた遷達の不安が大きくなっていった。憂に至っては目に涙を溜めて心配した

「唯先輩…！」

辛抱出来なかった梓が唯の肩を揺さぶり叫んだ

「え…?」起きたのが正気に戻ったのかはわからなかったが唯は涙の溜まった目で梓を見た

「あず…にゃん…?」

一度寝ぼけ気味に呼んだ

「あずにゃん!」

勢いよく抱きついた

「うあっ?唯先輩離して…」

梓がいることを確かめるように強くしっかりと抱きしめた

「う…う…」

安心して唯は梓の肩を濡らした

「唯先輩?」

「……」

皆は泣きじゃくる唯を見て顔を見合わせた

朝

食事、唯はトレーを持ち列に並んだ。皿の上に次々と見栄えの悪い食事が盛られていく

「目を瞑って食べばうめえぞ」

最近物資不足や機器の不具合から食事のクオリティ低下は否めないものになっていた

最後にスープの鍋の中にカップを突っ込み直接すくった

この日は監視任務があるので担当の監視檯の骨組みに腰を降ろした

「…」

悪夢にうなされみんなに心配されてた事に気がついた時から気持ち  
が晴れない

トーストをかじると砂を噛んでるようだった

「美味しい？」

澪が自分の朝食を持ち唯の隣に座った

「澪ちゃん…」

唯はフォークを置いた

「ん？」

「私…、自分が怖いよ」

「…」

澪はフォークを止めた

「人を殺しても平気になったってうか…なんとも思わなくなった自分が怖い…」ポタポタと唯の涙がトーストに落ち染みをつくっては消える

「それは…」

「それに…いっぱい殺してきたのに…あの時…！私が倒れたとき…！いきなり死ぬのが怖くなって…！」

「…」

「なんて自分勝手なんだろうって…！いっぱい殺したのに…！自分が死ぬのはヤダなんて…！」

澪は黙って聴いてやることしか出来なかった

「またみんなで演奏したいよ…！バンドしたい…！みんなで…！あの部室で…！みんなでお茶して笑いたいよお…」

本格的に肩を揺らし泣きだした

膝からトレーが滑り落ち地面と唯のブーツを汚した

「唯…」

澪は自分のトレーを置き泣きじゃくる唯の背中をさすった

「私も…バンドしたい…。あの部室にかえりたいよ…」

放課後ティータイムの思い出を1つ1つ思い出しながら背中をさす

った

律の一言で始まった軽音部、偶然な形でムギが入部して4月の終わりギリギリに唯が入部、最初はグダグダなところもたくさんあった。唯のギター購入の為にバイトや唯の追試、部活として認められてなかったり、それでもなんとかやってきた、2年になって梓が入部して…放課後ティータイムが正式に結成された。律や唯、時々さわ子先生に振り回されて困ることもあるし苦勞も多かった。だけど私はあの軽音部が大好きだった

合宿、学園祭や新歓ライブを思い出しているうちに漣自身も泣けてきた

「かえりたいよ」

「かえり…たい…」

声が弱っていく

遂に漣まで泣き出した

「励ましてる奴が泣いてどうする…」

律は少し監視檯の上から2人を見下ろしていた

「いいじゃない。泣かせといてあげましょう？時には泣く事も大切よ？」

紬は優しく笑ってそう言った

「お姉ちゃん……。澪さん……」

憂は純粹に2人を心配し食事にも手をつけれない

「考えてみれば部室にどれぐ……」

「あーやめやめ」

梓の言葉を律は止めた

「部活の話はナシ！こっちまで辛気臭くなっちゃまう」

そう言って律は残ったスクランブルエッグを平らげ片付けの為に降りていった

「律先輩…軽音部の事なんてどうでもいいのかなあ？」

梓はその背中を寂しげに見送った

その夜、PXの裏で独りで静かに泣いている律の姿を紬が目撃する事となる

## 憂鬱（後書き）

感想、指摘、アドバイス  
お待ちしております

## 転機

数台の高機動車が午後の高崎市に続く国道を進んでいた。赤城基地からの道中、道が崩壊していたり瓦礫や車両の残骸で使えない道路を避けて来たので結構な時間がかかった

そのうちのひとつの車内には憂鬱な表情を浮かべた漣達が乗っていた。道端に転がる瓦礫を何食わぬ顔で避ける運転手は器用だと思う

漣達はD中隊中隊長河原の命令で第15師団の本部がある高崎市に向かっている。理由は教えてもらってないがなんでも師団本部からの召集らしい

高崎市街に近づくに連れ高機動車の数は増えてきた

ドアには様々な部隊のマーキングが施されていて大規模な召集だという事がわかる

市内に入ると高崎市の戦災の爪痕が露わになってきた

建物はところどころ破壊され道には瓦礫や破壊された車両が放置されている。復興や警備のため市内にはまだ武装した自衛軍兵士や軍用車両の姿も多く物々しい雰囲気だ

そんな状況でも市民達は生活を始めていて市内には民間人の姿がちらほらと見受けられた。いくつかの商業施設は営業を再開し非番の

兵士相手に一儲けしようと企んでいる

そういった市民達の生活の影には工兵隊を主体とした復興支援部隊の活躍があり市民達からも感謝の声が上がっている

## 高崎駅前

高崎駅とその周辺は未だに軍の管理下にあり高崎駅にはQRF（緊急即応部隊）の臨時営舎があり駅前のショッピングモールに第15師団の本部が置かれている

高機動車の集団はショッピングモールの前に停車し澁達を含めた召集対象者を降ろすとエンジンをきった

周りを見回すと召集対象者達がいてその数は100はいる

「召集対象者はついてきてください」

本部から出てきたWAC（女性兵士）について小銃を持った2人の歩哨の間を通り師団本部のショッピングモールに入った

壁に貼り付けられた案内図には上からシールで各部署の名称が貼られている

デスクが並べられ何人も兵士がノートパソコンと向かい合い、その背後に置かれたホワイトボードでは日本地図を参照し作戦プランの話し合いをしている。その間を防衛省のマーク入りのフォルダー

を持った将校がせわしなく動き回っている。まさに軍事施設だ

そこを抜けていくと中央のイベントホールに出た。そこはパイプ椅子がイベント用の舞台に向けられ並んでいる

「では座って下さい」

言われるがままに座った

「なにが始まるのかな…？」

紬は薄に耳打ちした

「さあ…」

しばらく待つと軍服を着た50代の男が舞台上に上がってくるのが見えた。その男はメガネを掛け緩い顔つきで軍服がまたスーツっぽいのでただのサラリーマンにしか見えなかった

「こちら第15師団師団長の相沢ヒロシ准将です」

WACの紹介で全員が慌てて直立した。今まで師団長を見たことがない者が殆どだった

『えー。着席してください』

『紹介のとおり私が師団長の相沢です。今日諸君を召集したワケを説明しよう。諸君にはある共通点がある。なんだと思う？』

共通点？と唯は辺りを見回した  
しかしこの場にいるものは性別も年代もバラバラで共通点など見つ  
からなかった

『私も若い頃かじってたよ』

そう言っつてギターを弾くマネをした

「バンド…ですか？」

最前列に座っていた男が答える

『御名答。実は我々第15師団のいくつかの部隊が今月末に神戸戦  
線に投入される事となった。諸君達がその部隊だ』

溇達に戦慄が走った。神戸戦線は激戦地として有名だった。朝鮮軍  
も自衛軍も一步も退かず半月以上ぶつかり合い死傷者も鰻登りらしい  
師団長の背後のスクリーンに投入される部隊名が映しだされた

そこには溇達が所属する第59連隊の名もしつかりあった

『神戸に投入されるアメリカ軍の司令官から士気向上の為の音楽祭  
をしようという話しが来てな。それで君達を召集したわけだ。音楽  
祭のステージで演奏してもらうためにな』

唯達の憂鬱気味な表情がみるみる明るくなっていく

『開催地は今のところ大阪国際空港。日米60組が参加する丸3日

の大イベントだ。出演バンドは自衛軍からは28組、来週末日曜日にここで選抜オーディションを行う。各自練習しておくように!」

選抜と聞いて全員の表情に緊張と不安が浮かび上がった。

『以上!』

全員が直立しそれを見た師団長が満足げにステージを降りた

『選抜オーディションは来週日曜日、0700時に師団本部前に集合してください。ドラム一式、キーボード、アンプとシールドはこちらで用意します。それ以外の機材が必要な場合は各自で用意してください。各中隊本部にドラム一式とキーボードを発送しましたのでアンプ類は各自用意してください。PXで購入出来ます』

唯達はもう帰って練習したくてウズウズとしている

『では解散とします。各バンドはお近くの係員から用紙を貰ってから帰投してください』

WACはそう締めくりステージを降りた

唯と律は真っ先に近くで用紙を配っていた係員に向かってダッシュした

「ヨーシをくだせえ〜!!」

「ハイ!?!」

係員に若干引かれながらも用紙を貰いそれをみんなで眺めた

「おお…」

所属部隊名、バンド名、メンバー、パート、曲目、小隊長許可印、中隊長許可印などといういろいろそれらしい事が書いてある

「よし！早く帰って練習するぞ！」

「Oh!Yes！」

律と唯は露骨にテンションを上げ紬はそれに便乗するようにはしゃいでいる。梓は目を輝かせ澪は困り顔だが嬉しそうに律と唯を見ている。そして本日無意味に呼び出されていた存在がいた事を思い出した

その存在は柔らかい笑顔で唯達を見守っていた

「憂ちゃん…」

「どうしましたか？澪さん？」

「あ…ごめんね？こっただけで盛り上がったちゃって…」

「大丈夫です。私は皆さんが練習に打ち込めるように洗濯とか掃除とかさせていただきますので」

嫌みの全くない笑顔でそう言った

「うう…毎度なにかあるたび本当にありがとうございます」

帰りの車内は行きとは打って変わって騒がしかった。あまりの変わりように運転手も困惑気味だ

基地につくと中隊長河原と小隊長の葵が駐車場で漣達を出迎えた  
素早く降りて敬礼をする

2人も答礼し漣達に楽にするよう合図した

「どうだった？君達が軽音部だと聞いてとりあえず行かせてみたんだが」

「ありがとうございます！」

チャンスくれた河原に唯が頭を下げた

「いいんだ。こっちとしても出演してくれたら鼻が高い、それで？オーディションは受けるのか？」

「……………受けます！」

「そうか、じゃあ真木少尉、案内してくれ」

「りょーかいです」

連れて行かれたのは見慣れないプレハブ小屋だった。昨日までここには何もなかったはずだ

不思議に思いながらも中に入るとこのプレハブの存在理由がわかった

「もしかして…練習用のプレハブですか？」

「御名答 さつき組み立てたばかりだね。防音加工もばっちり、でも他の「うおー！ドラムだ！新品だ！ツインペダルだー！」使う「入口に放課後ティータイムって表札かけようよ！」「…」

「ちょっと待っててください」

透は葵にそう言い歩き出した

ドカッ

「うう…なんで私だけ…」

律は頭のたんこぶをさすりながら愚痴った

「他の中隊も使うから、基本は訓練優先、だけど警備や監視任務は代わりを立てるから、その時間を使って練習してね。突発的な事態のときはあの無線で知らせるから」

デスクの上に置かれた無線機を指差す

「銃器や装備品は隅にでも置いておいて。今日は日曜日だから私達の小隊は休み。今日は丸一日空いているから思う存分練習してね。それじゃ」

「「「「「ありがとうございます!!」「」「」」」」」

きつちり頭を下げ葵を見送る

「?そう言えば憂ちゃんは?」

頭を上げた紬が憂がないことに気がついた

ガチャ

「皆さん楽器持って来ました」

息を切らして戻ってきた憂の背中や手にはギター太はもちろん漣のベース、梓のギターに紬のキーボード、律のスティックまである

「( )( ) 本当に気が利くなあ・・・、そして器用・・・( )( )( )」

「じゃあ練習始めようぜ!」

「「「「「おー!!」「」」」」」

全員が拳を天井に向けやる気を見せた

漣が次々とアンプやシールドの調子を見る

「オーデイションで演奏するのはふわふわでいいよね？」

漣の意見に全員が合意する

「じゃああのプリント書いちゃおうか」

紬がそう言うと漣が頷き胸ポケットからボールペンを取り出した

「ほいプリント」

「曲、ふわふわ時間、バンド名、放課後ティータイム、所属部隊……」  
プリントの記入欄を次々と埋めていく

「よし、じゃあ行こうっ！」

「1・2！」

「ん？」

漣は違和感を感じた

何かがない

「ストップ！」

）  
…

それはやはりメインギター。つまり唯の担当メロディーがなかった  
それは全員がわかったらしく全員がゆっくりと唯を見た  
唯はギターを構えたまま気まずそうに俯いて口を結んでいた

「ゆ・唯……もしかして……」

澪はだいたいの予想はついていたが一応聞いた

唯は口を噤み気まずそうに頷いた

「わ・忘れた……」

全員がガクツとした

「そんな事だろうと思いましたがよお」

「ごめんなさ〜い！…あ！でもこれは弾けるよ！」  
「チャルメラなんか弾けても意味ないですよ！」

あーだこーだ

「なんだか懐かしいな」

澪が含み笑いをしながら律に言った

「そつだなー…」

梓に怒られる唯、その2人を微笑みながら見てる紬

「我らが軽音部のノリだよねえ」

転機（後書き）

感想お待ちしています

QRF

基地が不意に攻撃された時にその被害を最小限に食い止めるために  
24時間体制で常に本部と連絡を取りスタンバイしている

## 新潟市掃討戦1

先導に軽装甲機動車（LAV）を使ったトラックと高機動車の車列が新潟市の入口に当たる幹線道路に進入し停車した。トラックや高機動車のドアには59Dの文字、第59連隊D中隊所属車両だ

「総員下車！」

荷台から次々と兵士達が降り武器弾薬、通信機材を降ろしていく高機動車からは将校達が降りノートパソコンや書類を手に指揮所であるビルに駆け込んで行く

「っせーの！」

澁達はトラックから降りるとLAMの入った木箱を降ろしたそれを指定された位置に運ぶとそこにいたD中隊の兵士から待機命令が出たので各自準備するようにと伝えられた。補給部隊のトラックから弾薬やスポーツドリンク入りのペットボトルを持ち出し準備する

澁はブリーフィングがあるのでヘルメットと弾倉、水筒を律に押し付けると指揮所のビルに入った

「ブリーフィングですか？」

ロビーに入ると受付カウンターに座っていた兵士に声を掛けられた

「あ、はい」

受付嬢ならぬ受付兵…と漣は心の中で呟きながらも頷いた

「所属と名前と階級を」

「D中隊第3小隊第5分隊、秋山漣、軍曹です」

受付兵はバインダーに挟んだ用紙にチェックをつけた

「確認しました。D中隊のブリーフィングは二階の大会議室で階段を上がってすぐ右です」

このビルは開戦前は一般的な会社として使われていたらしく未だに各部署の案内図が貼られていた

漣はとりあえず言われた通りに階段を上がり右に曲がった

「すみません、D中隊のブリーフィングはここでいいんですよね？」

それらしき部屋の前に立っていた歩哨に声をかける

「あつはい。では武器はこちらに置いて、番号をお忘れにならぬように注意下さい」

歳は漣と大して変わらなさそうだが、戦前は接客のバイトをしていたのかと思えるぐらいの対応の良さだ

兵長に言われた通り89式小銃と銃剣を番号のふられた蓋ナシロッカーに立てかけて扉を開けた

室内は広く床にはパイプ椅子だけが無造作に並べられ各隊の指揮官達がそれらを埋めていた  
澁も近くにあったパイプ椅子に座った

「起立！」

入口に立っていた別の兵士が時間通りにやって来た中隊長の河原を見るなり叫んだ

指揮官達が一斉に立ち上がりパイプ椅子と床が擦れる音が響いた

「気をつけ！」

全員が一斉に気を付けの姿勢をとる

「ご苦労、かけてくれ」

河原以外が一斉に座った

「まずはみんなここ数ヶ月ご苦労だった。ここに来るまでにD中隊は18名が戦死し48名が負傷した」

(誰も一度も怪我してない私達は幸運かも…)

「死んでいった仲間達の為にも、我々はこの戦いに勝たなければならぬ」

沈黙

「ではブリーフィングを開始する。電気を消してくれ」

電気が消えると河原はデスクの上に置いたノートパソコンのキーボードを叩いた

すると部屋中央に置かれたプロジェクターが稼働しスクリーンに航空写真を映し出した

「これは先程情報科のUAV（無人航空機）が撮影した新潟市の航空写真だ」

写真には手が加えられていた。赤白黄緑の四色の色で薄く塗られていた、市の周りには市を封鎖するように自衛軍部隊が配置されている

174

「昨夜の大規模な作戦で関東地方の敵残存兵力をいくつかに集める事に成功した。この新潟市に集まった兵力の規模は歩兵一個大隊ほどだ。市内を4つの区域に分け狩りを行う。我々はこの緑色のエリアだ」

レーザーポインタで緑色のエリアの枠をなぞった

「作戦開始時刻は0820（マルハチニイマル）時。A、B、C、D一斉に市内に入る。第3第2小隊は先行し工兵隊が戦車橋を展開するのを援護、第3第1小隊は市内に入る。第2小隊は戦車橋の防衛だ」キーボードを叩くと赤い矢印が市内の道路を辿って進んでいく

「エリア内の敵を全て掃討し命令があるまで担当エリアを確保する」

最後に”質問は？”と付け足すといくつかの手が上がった  
適当に兵士を指名する

「支援は？」

「支援は、航空支援は4機のOH-1Bと1機のF2戦闘機が行う。」

「OH-1B？」

聞き慣れない単語に誰かが思わず聞き返した  
河原はキーボードを叩いた

「OH-1Bは技本（技術研究本部）がOH-1（観測ヘリ）をベ  
ースに開発した次期主力戦闘ヘリだ。まあ配備が開始されたのは最  
近だから諸君の多くは知らない機体だろう」

スクリーンにOH-1Bらしき機体の飛行映像が再生されている

「武装は30mmCTA機関砲、ヘルファイア（空対地ミサイル）、  
ハイドラ70（ロケット弾）、SAM-2だ。状況に応じて支援を  
要請しろ。他に質問は？」

兵士達を見回す

「では諸君の健闘を祈る」

そのころ唯達は地べた置いた弾薬箱とペットボトルを囲み準備を進めていた

唯はカチリカチリと小気味のいい音を奏で5・56mm弾を89式用の弾倉に詰め込む

紬もベルトリンクで連結された200発分の5・56mm弾を箱型弾倉に納めると水筒にスポーツドリンクを注ぎ込んだ。適当な量を注ぎ残りを隣に座る梓に渡した

「ありがとうございます」梓もそれを水筒に入れ空になったペットボトルを潰しゴミ袋にほうった

「今回の作戦が終わったら神戸戦線行きですか？」

「らしいね。そう言えばさ…」

唯は作業の手を止めた

「東京で核爆発起こしたの…。本当に大朝鮮なのかな…？」

律達の視線が唯に集まる

「なんでですか？」

「だってさ。今のところアメリカは大朝鮮に対して核報復はしてないじゃん。もしかしたらわかってないんじゃないのかな？核爆発起こした犯人が…。でも置き型爆弾だったら誰が犯人だかわからない

よね」

「確かに曖昧よね……」

「アメリカが核報復をしないのはもしかしたら他の戦争で忙しいからじゃないですか？」

「だとしたら2個師団も兵を送ってこないだろ」

律の意見に全員が確かに……といった感じで考え込み静かになる

「まあ私達みたいな下っ端には関係ない話だな。その辺の調査はアメリカの諜報機関がやってくれるよ。私達は……」

律は立ち上がり89式に弾倉を突き刺した

「私達の仕事をするだけだ」

「りっちゃんどや顔」

唯の指摘に律はずっこけた

「かつこよくキメさせるーっ！」

しばらくすると遷が帰って来た

大まかな作戦を説明すると律と梓が準備した弾倉と水筒を受け取り防弾ベストに取り付けたポーチにしまった

「もう少しで始まるから車に行こうか」

他にする事もないので高機動車の車列へ向かった

作戦に投入される高機動車は改良され全体が防弾使用になったらしく外見は民生のハマーに似ていた。漣達が搭乗するもの含めた殆どの車体の屋根にはM2重機関銃が居座っているが中には96式40mm自動てき弾銃（高速で手榴弾を撃ち出す銃）を備えた車両も見受けられた

漣は助手席に乗り込むと携帯音楽プレイヤーを取り出しイヤホンを付けた。再生ボタンを押すとお気に入りの曲が流れ込んで来る

とりあえず作戦が始まるまで眠る事にした

**新潟市掃討戦1（後書き）**

感想、アドバイス  
お待ちしております

## 新潟市掃討戦2（前書き）

今回は色んな洋画やゲームから影響を受けてます

（\*―\*；）

そしてある読者様から兵器の投稿を頂きました

ありがとうございます

m ( ( m

## 新潟市掃討戦2

高機動車群がかなりのスピードで走っている。やがて鉄条網や土嚢で形成された防衛陣地が見えた  
防御陣地を通過ししばらく進む

街のあちこちからは砲兵隊の砲撃による黒煙が上がっている

やがて工兵部隊と合流する。91式戦車橋を護衛するように高機動車とトラックが随伴している

すぐに市内へ続く橋に到着した。

川をまたぐ橋は情報通り敵に破壊され寸断されている。このままでは市内に入る事は出来ないため工兵隊の91式戦車橋を使い代わりの橋を設置する。だが敵もそれを阻止しようと必死だ

《総員下車戦闘！橋架下に展開し対岸の敵部隊を攻撃する！》

車両から降り橋下に広がる川岸に駆け足で展開する。91式戦車橋が前進していき橋の寸断部に近づいていく

対岸に戦車橋が展開するのを阻止しようと攻撃を加えている敵部隊が見えた

「戦車橋が展開するのを援護するんだ！戦車橋が破壊されたら全員で泳いで渡るハメになるぞ！」

葵が脅し混じりの指示を飛ばす

兵士たちは小銃や軽機関銃を対岸に撃ち込む

「橋にRPGチーム！」

戦車橋とは反対側の寸断部にRPGを持った敵兵がジープで乗り付けた

唯はとつさに弾囊から06式小銃で弾（小銃を使って発射する手榴弾）を引き出し銃口に差し込んだ

自分の感覚だけを頼りにおおよそで照準を付け発射した  
とき弾はそれなりのスピードで飛び狙い通りRPGチーム背後のジープに命中、衝撃で兵はバラバラと川に落ちていった

「ナイスショット！」と誰かが叫んだ

「戦車橋が完成したぞ！行くぞ！」

坂を駆け上がるなり高機動車に乗り込んだ。対岸の敵は戦車橋が完成したのを見届けると慌てて後退しだしやがて対岸に動くものが見れなくなった

「あれ敵じゃないっすか？」

葵の部下のひとりが橋に戻るなりそう言った

「どれ？ああ…あれね。…こちらデルタ3、空爆を要請する。目標は一番南西にある団地」

《ネスト（連隊指揮所）了解、現在F-2がそちらに向け飛行中、待機しろ》

しばらくすると2機のF-2が飛来し目標建物に爆弾を投下した

それは必要以上の破壊力がありそうで衝撃と迫力は凄まじかった

「おおおおー！」

「すっげえ！週間再生回数トップはいただきだぜ！」

「ざまあみやがれ！！」

隊列のあちこちから歓声やら空爆の感想やらが上がる。唯達も歓声をあげながら崩れ行く建物を眺めていた

「全員車両に乗れ！出発するぞ！」

味方の空爆で俄然やる気になった兵士達が士気旺盛に車両に乗り込んでいく

紬は車両に乗ると銃座のキャリバー50口径機関銃M2についた。

漣は助手席、残りの4人は後部座席と装甲で覆われた荷台部に乗り込む

《デルタ3、移動する》

ゆっくりと車列が動き出した

《こちらデルタ1、デルタ2、3と合流、市内に入る》

《こちらホットブラッドマン、予定どおりデルタ3に同伴し市内に入る》

《熱血漢のご同伴か…》

各車両が交信をしながら市内に張り巡らされた道路のいくつかを低速で進んでいく

《警戒を怠るな。どこから撃たれてもおかしくない…》

「ゴーストタウンみたい…」

憂がシャッター商店街を見つめながら呟いた。おそらく市民達はいない、避難したか、粛清されたか…。聴こえるのは車両のエンジン音と時折入る無線交信だけだ

「イヤな予感しかしない…」

漣は呟いた

静かすぎる

「今までいい予感した事があったか？」

漣が小馬鹿にしたような笑いを漏らした

「それは…。確かにそうだけ…」

漣はそう言つと団地のベランダから何かがぶら下がっているのが見えた。車列が進むに連れそれはだんだんよく見えてくる

「…ッ！」

それは死体だった。顔に朝鮮の国旗を巻き付けられ時折来る突風に揺られている。

「むなくそ悪い光景だな…」

漣は顔をしかめた。おそらく見せしめだろう。死体には自衛軍兵士はもちろん警官、一般市民、朝鮮兵のものまであった

やり場のない怒り、そして悲しさを感じながら吊された死体を見えなくなるまで見届けた。

数分進むと民家の数が減りチラホラ雑居ビルやコンビニが見え始めて来た。担当区域の中心部に近づいて来たようだが未だに敵の気配はない。大通りに出る道にさしかかった。両サイドは高級マンション、片道一車線の道路だ

「もしかして空ば…」

律の言葉は衝撃と爆発音で途切れた

両サイドの土やコンクリートが飛び散り車両部隊に襲いかかる

高機動車のボンネットに火花が散った

タタタタタタ

機関銃の音だ。車体に次々と火花が散る

《待ち伏せだ！》

どうやら敵はこの狭い道に爆薬を仕掛け待ち伏せていたらしい

《下車戦闘！》

慌てて車内から飛び出しビルの柱や車両の影に隠れたすぐに舞い上がった砂埃は晴れ両サイドのマンションの廊下に敵兵が見えた。そ

の数は左右合わせて50はいる。敵は軽機関銃や小銃を車列に向け撃ち降ろしてくる

マンションのロビー入口に隠れた唯の位置から紬がいきなり車内に落ちるように倒れたのが見えた

「ムギちゃん!？」

唯が車内に身を乗り出し紬の容態を確かめた。弱々しいが紬には意識があった。出血がないところを見ると撃たれたわけではないようだ。紬は虚ろな目で唯を見ると申し訳なさそうに笑い口を開いた

「ごめんなさい…。なんか…クラクラするの…」

どうやら爆発の衝撃をくらい軽度の脳震盪を起こしたようだ

「大丈夫だよ!えと!りつちゃん!！」

近くにいた律を読んだ

すぐに律がヘルメットを手で押さえながらやって来た

「ムギちゃんが…!」

唯が全てをいう前に律は理解した

「ロビーの中に運ぶぞ!唯!ムギのミニミ使って援護を!」

「わかった!」唯は89式を背中に回し車内に転がっていたミニミ軽機関銃を引っ張り出した

「おつも…!」

ミニミは10kg以上ある。それを少女に持てというのは酷だった。律は紬の肩を持ち車外へ引っ張った。

「行くぞーっ!」

ゆっくりと防弾チョッキの肩を持ちマンションのロビーへと引っ張っていく

それに同伴する唯は手の痛みを我慢しながら腰だめで撃ちまくった。再度紬の腕力に感心した瞬間だった

「ごめんなさい…」

ロビーに運び込まれた紬はまず謝った

「いいんだよ。それより銃は撃てる?」

「ええ」

「もし中から敵が出てきたら撃って!」

「わかったわ…」

「ほいムギちゃん!」

唯はミニミを紬に渡した。2人は背中に回していた89式小銃を持ち替え通りに出て行き戦闘に加わって行った

マンションの廊下の転落防止の柵はコンクリート製の為小銃弾では  
撃ち抜けない

「こちらデルタ2からグリフォン1、機関砲による支援を要請」

《グリフォン1了解、到着は30秒後》

戦闘ヘリ特有の重く力強い羽音が聞こえた

OH-1の武装改修型、OH-1Bだ

機首の30mmCTA機関砲が一番敵の多い右側マンションに向け  
られる

機関砲の銃口が光った

30mm弾が柵を粉碎し朝鮮兵達をミンチ肉に変えていく。朝鮮兵  
達は慌てて逃げ出すが素早く撃ち出される30mm弾から逃げ切る  
事は叶わなかった

反対側の朝鮮兵達はOH-1Bの迫力に圧倒され逃げ出したあとだ  
った

OH-1Bは高度を上げるとFLIR（前方赤外線暗視装置）を使  
いマンション全体をスキャンした。FLIRにかかればマンション  
なんてガラス同然、どこに隠れようが無意味だ

OH-1Bは高度を下げ30mmCTA機関砲やハイドラ70（口

ケット弾）をマンションに撃ち込み制圧を始めた。管理人や住民が見たら激怒、もしくは泣き出す事間違いないの光景だ

《こちらグリフォン1、敵を無力化、マンション内の熱源は消滅した。なお弾薬補給のため帰投するので一時的に支援が行えなくなるの》

グリフォン1のパイロットからの報告を確認すると葵は全員に乗車するよう促した。唯達は紬を支えながら高機動車に戻った。紬は大丈夫そうだったが一応荷台で寝てもらおう事にした。その代わりに唯が銃座に付く

上空をF-2の編隊がグリフォン1とすれ違う形で通過した。戦線から逃げ出す将校達を乗せたヘリを迎撃するのだろう。どちらにせよ街は包囲されているので逃げ道などないのだが

車列は担当区域の中央を走る幹線道路に進入した。破壊された99式戦車や撃墜されたC-130が目につく、だが敵の気配はない

《デルタ3からホットブラッドマン、残骸をどかし道を開いて欲しい》

《了っ！！》

車列の左側をホットブラッドマンこと10式戦車が地を揺らし迫って来た。ホットブラッドマン、直訳すると熱血漢

ホットブラッドマンが通過した瞬間、何故か「熱くなれよおおお！」と唯はどこからか聴こえた気がした

「天の声!？」

そんな事はさておきホットブラッドマンは道を塞いでいたU H - 6 O P ( U H - 6 0 の大朝鮮軍仕様 ) の残骸を車体に取り付けたドーザーでどかし、道をこじ開けた

上空をグリフォン1とは別のO H - 1 B が飛来した。おそらくグリフォン2、それは一時的にスピードを落とし辺りを見回すかのような動作を取るとビルの多い中央部へと飛び去っていった

《停車。周囲を固める。ここで戦車隊を待つ》

車列が停止した

D 中隊は後続の戦車隊と合流しこの幹線道路を中心にO H - 1 B と高高度を旋回するR Q - 4 グローバルホーク無人航空機と連携し掃討する事となる

D 2 小隊とD 3 小隊で幹線道路を確保する戦略が取られた

《ネストからデルタ、南西部からそちらに向かう敵部隊を確認、規模は歩兵30に戦車2両だ》

「戦車って…んなものどこから…。軽MAT ( 0 1 式軽対戦車誘導弾 ) 用意しておけ！」

葵が怒鳴ると数名軽MATを持った部下が後方から走って来た

「秋山軍曹！君の隊はコイツ等連れてあそこで警戒と狙撃を頼む」

雑居ビルの砲撃が何かで角の屋根と壁がなくなっている部分を指差した

あそこなら狙撃にも向いているし軽MATも発射可能だ

「了っ！」

警戒しつつ、早足で階段を掛けていくと目的の部屋についた。見事に壁と天井が挟られ風が吹き込んでくる

憂は89式小銃の二脚を展開し伏せ撃ちの体勢を取ると狙撃単眼鏡スコップを覗いた。

すぐに例の敵部隊が見えてきた

99式戦車が二両、歩兵約50人、武装はK2自動小銃とコピー品のジャベリン（携帯式多目的誘導弾）  
憂はそれを皆に伝えた

「それじゃへりと戦車はムリね…」

紬は残念そうに呟く

幸いにも戦車は車列の護衛に周りへりはこの場にはいない

「こちらデルタ35、敵を目視」

《デルタ31了解。攻撃出来るならしてくれ》

「軽MAT用意。ダイブモード（戦車の弱点である上部に誘導弾を落とす方式）」

軽MAT要員を指揮する男の声で2人の軽MAT要員が頷き照準器

を覗いた

「照準完了」

「平沢一等兵の狙撃が合図に発射でよろしくお願いします」

他の兵がいるのでやむを得ない事だが少し寂しさを感じつつ憂は引金に指を掛けた

戦車の砲塔から上半身を乗り出しなにやら怒鳴っている男が映った。その男は戦車兵が被るヘルメットでは無く赤いベレー帽を被っている。

多分あれが指揮官…

憂はそう考えた

しかし戦車は軽MATが潰すので別の重要そうな兵士を捜した。だがどれも似たり寄ったりで適当にジャベリンを持った選り照準を付けた

風、目標の進行速度を計算し”多分これぐらい”的な考えで照準を合わせた

息を止め、引金を引いた。その朝鮮兵は顔面を抉られ仰け反ったのちに倒れた

「つてえ！」

続いて2発の軽MATが発射された。誘導弾は一度空高く上昇、そしてほぼ落ちてるのではないかと思うぐらいの角度で戦車の天井部目掛けて飛んだ

「戦車2両！沈黙！」

その間にも憂は黙々と朝鮮兵を葬っていく

憂は類い希に見る狙撃能力を持っていた。訓練所でたった一発撃つただけで弾道と風の影響力を理解し残り全弾を全体的の中心に命中させた事は有名な話で今も学兵訓練所では語り継がれているとかいないとか：

見事奇襲は成功した

だが僅か10名にも満たない歩兵が三倍近い兵力の敵部隊を全滅に追いやるには無理がある

だが敵は戦車を2両とも失い、更に奇襲を受けた精神的なショックからか慌てて引き返して行った

「デルタ35、敵は敗走、追撃は？」

漣はその事を伝えた

《いや、いい、たった今司令部から入った情報によると敵兵力は県庁に集結しているらしい。部下を引き連れ車両に戻れ、戦車隊の連中が到着次第県庁に向かうぞ》

## 新潟市掃討戦2（後書き）

感想、アドバイス  
お待ちしております

新潟市掃討戦3（前書き）

これぞゴミックオリテイ

ごめんなさい

### 新潟市掃討戦3

「そろそろ着くから…。唯起こしてあげて」

澪はバックミラーに写る唯のヘルメットの頭頂部を見た

「唯」

律は隣で幸せそうに眠っている少女の肩を揺する

「大丈夫だよ…今日はにちようびい…」

起きるところか口の端から涎の川が出来そうだ

「なんてポジティブシンキング…」

律は呆れ顔でリトライする

「ゆーい！唯ってば！ギターだぞ！ライブだぞ！」

次は先ほどより強めに揺すったが唯は顔をしかめるだけで起きる気配はなかった。ここで律は切り札を出す

「ケーキだぞ〜」

「ん…」

”ケーキ”に反応し顔を上げた

「お、起きた」

唯はキョロキョロと辺りを見回すと

「…ない…。うそつき…」

そう言つてまた顔を下に向け眠りだした。振り出しに戻った

「唯！着いたぞ！」

見かねた澁が後ろを向き平手でヘルメットを連打した。これには流石の唯もたまらず顔を上げた

「んあ」

「着いたぞ」

「…つい…」

「涎…垂れてるぞ、よく寝れたな…」

そう言つて袖で唯の口元の涎を拭った

「ありがとう」

D中隊を乗せた車両部隊と戦車隊は新潟県庁行政庁舎の前に待機していたB中隊の小隊と合流した  
車両からD中隊総員150名が飛び降り車両を盾にして18階建ての庁舎へ銃口を向ける

湊達の降りた地点の近くに停車した82式指揮通信車の後ろでは河原と状況説明に来たB中隊の小隊の連絡要員が会話していた。まだ寝起きの唯の位置からもしっかりその内容が聴こえて来る

「行政庁舎に籠もったのは約200人から250人、奴らおとなしいもので籠もったつきりなんの行動も起こしていません」

「警察庁舎と議会庁舎の方は？」

「A中隊が二手に分かれ突入、制圧する予定です。なお各庁舎を繋ぐ回廊はヒトマル（10式戦車）の砲撃により破壊済みです」

「県庁舎に対する砲撃や使用武器が限られてるとは驚きだな」

河原はあきれ気味にそう言った

「県知事が許さなかったんですよ。まったく、住宅地の空爆は許可しなくせに……」

「ふざけた話だな」

「ええ、まったく、ではちょっと失礼します」

連絡要員は敬礼をすると踵を返しパジェロ（73式小型トラック）へと戻っていった。だがパジェロは発進する様子も無く連絡要員は車載無線器で何かを伝えると河原の所に戻り2人で煙草を吸い始めた

「まもなく原隊（B中隊）が来ますので」

「わかった」

河原は煙草の火種にトドメを刺すと通信車に入ってしまった

《デルタ各員へ、まもなくB中隊が到着する。そしたらすぐにでも突入だ。準備しておけ》

すぐにB中隊の高機動車達が到着した。バタバタと兵士達が飛び降り警戒態勢を取る

少々緊張感に欠けていたD中隊もそれを見て緊張感を取り戻した  
後は突入の時を待つだけだ

《前進！》

「命令が出た！前進！」

遂に突入の時が来た。

突入部隊が県庁に駆け寄る

「閃光発音筒！」

89式のストックで窓ガラスを割り中に閃光発音筒が次々と投げ込まれる

閃光発音筒が炸裂し雷が落ちたような光りが発生した

「突入！」

「突入　　！！！」

あちこちから突入の掛け声上がる

割れた窓ガラスから、蹴破られた入口からB中隊、D中隊350名が次々と雪崩れ込みロビーで悶え苦しむ朝鮮兵を次々と射殺していく

「1階制圧！！B1小隊は地下と2階を確保！そのほかは上階を制圧しろ！」

兵士達が全ての階段を使いスムーズに上下階へと向かっていく

行政庁舎は地下含め19（地下1）のフロアで構成されている。350名の大集団は各フロアを風潰しに制圧するには十分な人数だ

「D3小隊は6階を制圧！その後最上階だ！」

「了解つ！」一気に6階まで駆け上がる。その時にも警戒は怠らない

6階に到達したD3小隊の面々が廊下を駆け回り片っ端から扉を開けていく

息を切らさない彼らの体力は訓練の賜物だろう

「手榴弾！」

袖が扉を開け溼と唯が手榴弾を室内に投げ入れる。そして扉を閉める扉の向こうから絶叫が聞こえてきたが爆発音でかき消される

すぐに扉を蹴破り手榴弾では死にきれなかった連中の息の根を止めてやる。

「クリア！」

いわゆるクリアリングと呼ばれる戦術だ

廊下のあちこちから”制圧”の聲が上がる  
部屋はもちろん、トイレ、机下、排気ダクト、人が1人でも入れそ  
うなところは隈無く捜していく

「6階オールクリア！」

葵の口から宣言が出された。6階までは自衛軍が制圧した事となる  
下層から別の小隊が階段を駆け上がり上階へ向かって行く。この要  
領で制圧作戦は行われていく

次は最上階だ

最上階へ続く階段にさしかかった時

上からカランカランと何かが転がって来た



予想した衝撃が来ないことを不審に思い片目を少し開けた

「あ……」

手榴弾が転がっていた位置に兵士がうつ伏せで倒れていた  
体の下には血の池を形成している

彼は身を挺して手榴弾から仲間を救ったのだ

床に認識標が落ちていた。チェーンがちぎれ血と肉片でピンク色に  
光っている

律がそれを拾った

親指で血と肉片を拭い取ると持ち主の名前が現れた

SHUZO NEMOTO

あのやつれた冷酷そうな男だ  
言われてみれば血塗れた顔は修造のものだ。

彼を変えたのはなんだったのか、以前の彼はどんな人物だったのか、  
それもわからないまま彼は死んだ。彼の部下、小椋とかいうあの男  
もいつの間にか戦死していた  
よって以前の彼を知る人物はもういない

正直彼にさほど興味があつたワケでもないが…

律は認識標を亡骸の背中に乗せ合掌した。すぐに小銃を掴み階段に向けた。人が1人死んだからといって戦闘が終わるわけでもない

「閃光発音筒！」

先頭の隊員が器用に上階へ投げ込む  
すぐに閃光と爆音が朝鮮兵をねじ伏せた

「行け行け行け！」

D3小隊が遂に最上階に到達した。朝鮮兵を片っ端から射殺し部屋という部屋に手榴弾を投げ入れ制圧する。漣達は他の部屋から少し離れた資料室の前にしゃがんだ  
資料室の扉は歪み壁との間に少しだけ隙間を作っている

憂は棒に付けた小さな鏡を取り出しその隙間に入れた

しばらく眺めると鏡を戻した

「将校みたいです…。人数は4人…。多分ここの指揮官…」

漣は少し考えると意を決したように口を開いた

「突入して生け捕りにしよう」

その言葉で漣以外の表情が曇った

「漣ちゃん……。それは……」

唯はボソボソと呟く

「なに？」

「私達に生け捕りは無理だ。他の分隊を待とう」律は大真面目な表情で提案した。生け捕りは制圧より高度な技術を要するからだ

「こつこつというのは機を逃したらダメなんだ！今やれば間違いなく成功する！」

漣は小声ながら叫んだ

その目は完全に軍人のそれだった。獲物に飢えた獣の目に近い

「……………」

律はしばらくその目と対峙し

「……わかったよ……」

ため息混じりにそう言った。納得したわけではなさそうだが

呆れた感じ

「律先輩……」

梓も突入には反対だったが律が折れてしまったので意見できなかった

しびしびといった感じで突入の用意をする

澗が扉を思いつき蹴破り部屋に突入した

朝鮮兵達は慌てて拳銃やら小銃を手にした。その中には憂の言った通り将校がいた

すぐに小銃を向け威嚇した

「動くな!!」

「武器を捨てろ!捨てるんだ!」

銃口と銃口が対峙し日本語と朝鮮語の怒声が飛び交う。誰もが普段の言葉遣いを忘れ口任せに怒鳴っていた

「捨てろ!!」

ひとりの敵将校が構えた拳銃の引金に指を掛けたのを唯は見逃さなかった

迷わず引金を引いた

一発の銃声を合図に銃声が多発する

次々と死の舞を舞いながら倒れていく。5秒もせず立っているのは  
漣達6人だけとなった。部屋は漣達の洗い呼吸音と空薬莖が転がる  
音に支配されている

漣は一息つくと死体の手元に落ちていている小銃や拳銃を足を使い死体  
から離していく

「生きてる…」漣が見つけた将校はうつ伏せに倒れ苦しそうに唸っ  
ていた

漣は彼の肩と地面の間に爪先を入れ込み無理やり仰向けにさせる

将校服の胸には人民軍大佐を示す埃まみれの階級章が縫い付けられ  
ている。腹部には銃創があり服を血で滲ませていた

「梓、来て」

梓を読んだ

その声は少し嬉しそうだ

「はい…」

背中の中の無線機の受話器をむしり取った

「こちらデルタ35、敵人民軍大佐を生け捕りにした。場所は最上  
階。至急衛生兵を要請します」

《こちらデルター1、よくやった。至急衛生兵と増援を送る。本当によくやった》

漣は受話器を戻すとデスクや棚を漁り始めた

ハンゲルが刻まれた書類やフォルダーを手に取りそれをまとめる

唯達はその様子を黙って見ていた

自分の目に写っている背中では漣の物であって漣の背中ではない気がした

軍部に忠実な1人の兵士の背中

いや、漣だけではない。自分達も軍部に忠実な兵士な気がした

漣は書類を集め終わるとそれをデスクの上に置き自分もデスクに座った。今にも崩れそうな天井を見つめて目を瞑った

またあの2人だ

優しく笑う2人の男女

恐らく私の両親

最初の頃は両親を思っては夜な夜な1人で泣いていた

だけど戦闘を重ねる度にその数は反比例していった

戦場にいるとで生きている実感が湧いた

今までにないほど自信が持てた

最近では何故か心が安まる事もある

あの日の私はもういない

どうやら私は知らない間に平穩を捨てていたようだ

私はもうあの部室には戻れないのかもしれない…

「ムギちゃん…?」

一方唯は壁にもたれて動かない紬を不審に思い肩に手を掛けた

ドサッ

紬が倒れた

「ムギちゃん!?!」

「ムギ先輩!?!」

「ムギ!?!ムギ!?!」

誰もが慌てて駆け寄った

律が苦しむ紬の上半身を抱き起こすと生暖かい赤色の液体の存在を知る

「誰か！！衛生兵！！」

憂が叫んだ

焦りが増す

すぐに医療用具を満載した背嚢を背よつた衛生兵と無線兵が到着した衛生兵は紬の装備類を外し傷の具合を見ると同伴してきた無線兵の無線機を掴んだ

「こちらブラヴォー12、WIA（負傷者）が発生した。至急行政庁舎屋上に救護へりを寄越してくれ」

《ネスト了解。至急ヒューイ（UH-1）を送る。待機せよ》

「ブラヴォー12了解。担架だ！担架！担架持つて来い！」

すぐに後続の者が背負っていた担架を展開させる。2人がかりで紬を担架に乗せた

「ムギ！ムギい！」

律は泣きながら紬の手を握った

紬は握り返したがその握力は弱々しい

「私なら大丈夫だから…」

脂汗が浮かび色もよくない顔で紬はムリに笑った  
彼女なりに唯達を安心させたかったようだがそのひ弱で今にも消え  
そうな笑顔は皮肉にも不安を倍増させる

彼女を乗せた担架は階段を上がって行く

唯達はそれを追った

誰かとぶつかっても気にも止めなかった

最後に見たのは屋上で待機していたU・H・1に飲み込まれる紬の姿

そのまま一生逢えなくなるような気がして

怖かった

無力に泣く事しかできなかった

律は紬の血で塗れた右手を見つめた

そして

漣の横顔を睨み付けた

## 新潟市掃討戦3（後書き）

総合評価が100を越しました  
ありがとうございます！

突然ですが  
登場人物の募集をしたいと思います

え？

駄作者がなにを生意気につて…？

まあまあ

投稿方法は感想なりメッセージなりなんでもいいです（できれば感想）

とりあえず条件としては

- 1、日本人である事
- 2、チートキャラではないこと、”人間”である事
- 3、標準語を話す事
- 4、年齢が15～35である事
- 5、視力がおおむね0.6以上である事、もしくは裸眼視力がおおむね0.1以上で矯正視力が1.0以上ある事

以上です。5は嘘です

誠に勝手ながら生死、装備は作者の方で決めさせて頂きます。（理想の死に方があればメッセージで）

なお募集するのは新兵と補充要員です。

本編の感想と共にキャラクターの名前とフリガナ、年齢、性別、徴兵前の職業、性格、一人称、使用武器（89式小銃 or M I N I M I 軽機関銃）、その他説明を書き込んで下さい。

採用されればそのキャラが唯達と共に戦ったりします

お一人様に付きキャラクター一人までです。ある程度集まったら選考します

そうしないと唯達と絡ませられないからネ

優しい理想的人間キャラから投降兵を撃ち殺すような鬼畜キャラ（漣達に戦闘中後方から撃ち殺される可能性あり）まで、なんでもOKです！

以上未熟者の戯れ言でした。

こつこつこのやってみたかったの…

番外編：新兵・補充者内定者リスト

えー、いつも閲覧ありがとうございます。

今回は番外編という事で皆様から頂いたキャラクター案の中から登場が確定したキャラクターをリストアップしようと思います。

キャラクター名・・・投稿者様

平沢頼・・・タケケ様

加藤良和・・・ダス・ライヒ様

菊松康平・・・景浦実（阪神虎之介）様

鈴木純・・・回路焼付機様

檜沢翔・・・鋼のミサイル屋様

稲荷忠勝・・・国土交通様

戸川愛・・・pipi | pipipi様

随時追加予定

まだまだ募集中です。詳しくはお手数ですが前話の後書きか活動報

告をご覧下さい

（ ・ ・ ） ヲ

追記：10月3日

誠に勝手ながらメインの新兵、補充者の募集は10月3日午後23:30現在をもって締めさせていただきます。採用されなかった方に關しましてはちよい役で登場となります。今後も補充案は一応受け付けますが採用されてもちよい役となる可能性が高いです。

すれ違い1 (前書き)

どうしてこうなった

## すれ違い 1

翌日

「今日から君は軍曹では無く」

ビリビリと音をたててマジックテープで固定されていた軍曹の証が剥がされる

「曹長だ。おめでとう」

軍曹より一階級上の曹長の階級章が貼り付けられた。本来喜ぶべきなのだろうが紬の事もあり心境は複雑だ

「そして捕獲を指示した君には勲功章が、更に琴吹兵長には名誉戦傷章が送られる事となった。おめでとう」

拍手が聴こえる

「ありがとうございます。…あの、ムギ、琴吹兵長は？」

「病院で入院中だ。弾は貫通し命に別状はないそうだ。本人が希望すれば任期の解約も可能だろう」

「そう…ですか」

正直複雑な気分だ。紬には安全な場所にしてほしいと思う反面、一緒に戦ってほしいという願望もある。彼女の事だから戻って来る、

そんな気がした。だがその時はどんな顔で出迎えたらいいか…。様々な気持ちで混ざり合い澆の気分は更に暗くなる

「勲章が届くのは3日後だ」

「あの、私が貰う勲章で私の分隊全員を除隊させることは可能ですか？」

河原はそれを聞き残念そうに首を振った

「残念だがそれで除隊出るのは1人だけだ」

それを聞いた澆は落胆する他なかった

「そう……ですか……」

その日はそれまで駐屯していた基地の引き上げ作業だった。

戦車などの輸送能力を持たない車両達は警備の数両を残し新潟空港に移動を始めヘリコプターも車両や物資の空輸に駆り出されている。次々とトラックで朝鮮兵の死体が送られてくる。どれも五体満足でない物ばかりだ

「もう…最悪だよ…」

唯はマスクのように巻き付けていたストール越しに呟いた。唯達の

前に広がる穴、そこから死臭と大量のハエが湧き上がっていた。運ばれてきた死体の中には腐敗の始まっている物も多くどうしてもハエが付いて来てしまう

さつきまで基地で糞便にガソリンを撒き焼却する作業に追われ、昼食後は日本人遺体の身元確認作業と埋葬、今度は朝鮮兵の死体焼却の応援だ

ある程度死体が積まれた

「気が進みませんなあ……」

律はため息混じりにストールを目より下を隠すように巻きつけポリタンク2つを持ち上げた。

結構重い。歩く度に中の液体が動き回りそのまま持って行かれそうになる。穴の縁に立つと1つのキャップを開いた

「失礼しますよっ……っ」と

そう言っつてポリタンクを傾け中身を死体の山にかけていく。軍服に液体が染み込んでいく。死体の鼻や開いた口に液体が入り込んでいく。ポリタンクを空にしマッチを着火させほった

液体に引火し死体の山が火に覆われていく。律はそれを確認すると合掌し唯と死体の山の下に戻った

「運ぶぞ」

「っつっ」

律は死体の上半身を唯は下半身を持った。かなり重く感じる。臭いもキツイし死後硬直でなかなか運びづらい

唯は死体を1つ炎の中に放り終えると思考した

死体を見るのには大分前から慣れていた。焼くのに多大した抵抗は無い。死臭が衣服に染み込むのでは無いかという心配する余裕まである。だが死体の臭いはいつまでも慣れる事はなかった

時折悲しくなる、部屋にいた頃の自分が別人のように思えてならない。あの頃は普通だったあの日々に戻れたらどれだけ幸せだろうか、それが許されるのだろうか

「唯、見てみる」

律の呼びかけで思考は打ち切られた

「へ？」

律が顎でしゃくった先には朝鮮兵の死体の山……を興味深そうに触る少年兵が数名、次の瞬間

「あつたあつた！」

少年兵は小さな物体を手に叫んだ。指輪だ

「バカ！上官に知れたらことだぞ！」

彼等は朝鮮兵の死体から貴金属類を頂戴しこっそりポケットに忍ばせていた。もちろん軍規違反だし犯罪だ。

2人は注意や上官に報告する気にもなれず、作業を再開した

1日中、骨と肉の焼けるヤな臭いが漂っていた

撤収作業が完了し漣達が新潟空港に入ったのは夜9時過ぎだった。兵士達は来るべき関西へ飛び立つ時までターミナルの様々な部屋や空間で休息を命じられた。漣達は滑走路を見渡せるロビーに仕切り板を置き空間を確保した

「律……」

漣を一瞥し視線を手元の木材と銃剣に戻した。木材を削る音が寂しく聴こえる

カッ…

カッ…

カッ…

カッ…

「律……」

カッ…

カツ…

カツ…

「律！」カツ…

律は銃剣を止め溍を見た、いや、睨んだといったほうが正しいかもしれない

「なに？」気だるそうな返事を一つ

「どうしたんだよ？」

律はそれを聴くと鼻で笑った

「”どうしたんだよ？”昇進に勲章、そりゃ気分いいよな」

銃剣をしまい立ち上がった

「……………」

溍は気まずそうに律から視線を外した。律は構わず溍に詰め寄って行く

「ムギが病院送りになったのもお前の所為だ…。お前が暴走して突入を強行させたからだ…。もしムギが死んだら…」

「りっちゃん！！」

唯の諭すような大声で律はハツとし居心地が悪そうに俯いた

「…じめん」

唯に向けそう言つと立ち上がり足早にロビーから出て行ってしまった

漣は黙つてその後ろ姿を見届けていた

何も言えなかった

それ以前に反論する気にもなれなかった。紬の負傷は自分の所為だということにはわかつていた。それを指摘されると心が痛む。タイムマシンがあるならあの時の自分を殴つてやりたい。現実はそのなに甘くない、と、それで貰える勲章に全員を除隊させる程の力はないと伝えてやりたい。後悔の念と自分に対する憎悪が心の中で混ざり合う

気が付いたら涙が零れ落ちていた。罪悪感からか…、みんなから敬遠されてる気がする事からの寂しさからか…

「漣さん…、使つて下さい」

「あ…ありがとう」

ハンカチで目頭を押さえ自分のコット（折り畳み式ベッド）に座った。目の奥の辺りがじんわりと暖かく感じる。涙を堪えようとすればする程、涙はポロポロと溢れ出して来る

「ぶっ…っ…っ…っ…」

肩を揺らし頬を涙が伝う

唯が心配そうに漑の隣に座った

「漑ちゃん……。ホントに…勲章が欲しかったんだよね？」

「唯せんぱ……」

心無さそうな唯の発言に梓はムツとし怒鳴り掛けたが意図を理解していた憂が制止した

「漑ちゃんが欲しかった勲章があれば私達全員が除隊出来るから…  
でしょ？」

「ふ…う…うん…うっ…」

咽びながらも漑は答える

「でも漑ちゃんの欲しかった勲章じゃなかったんだよね？」

「う…うん…っふ…。わたしが…もらったのじゃひとりしかじ、じ  
よたい…できない…んっ…から…」

つつかえながらの漑の声に唯は優しく頷き続けた

「わ、わたし…ムっムギと、りっにい…謝らなく…ちゃ…ひくっ…  
うっ…」

「そうだね。私も協力するから、仲直りして、ムギちゃんが治った

らさ、またみんなで仲良くバンドしょ？フェスはムリでも、みんな  
で演奏出来れば私は満足だからさ」

「……うん」

迎えのアメリカ軍のC-117輸送機のエンジン音がヤケに大きく聴  
こえた

すれ違い1（後書き）

感想指摘アドバイス  
お待ちしております

## すれ違い2

律は滑走路の片隅を歩いていった。駐機スペースではC-17グロブマスター大型輸送機が翼を休め、隅では蒲鉾型の仮設情報センターが設けられ情報将校達が情報解析や会議をしている。入口の完全武装した歩哨からその重要さが理解出来た

廃材置き場に着くと適当な木箱を見つけ置き直した。それに腰を下ろし銃剣と削り途中の木材を取り出し作業を始めた

「ふう………」

見る見るうちに木材が削れ小熊が浮き出てくる。テディベアを彷彿とさせる形だ

「……………」

勢いであんな事を言って挙げ句飛び出して来てしまったが……。と少々の後悔の念を抱いていた

漣と決裂するとは思わなかった。自分は何をやっているのだろう、漣だって自分達の為に下した決断だったのだろう。それなのに自分は責めるだけ責めて逃げ出した。だがいったいどうしたらいいのか。漣と仲直りする事は紬に対する裏切り、そう感じてしまう

カッ

小熊の首が飛んだ

自分は何を考えているのだろうか。

ムギの心がそんなに狭いわけない……

律は軽い自己嫌悪に陥った

「漣に……謝ろう……」

そう決心し、立ち上がった

その時

突如警報が鳴り響いた

突如として空港内が騒がしくなる。格納庫からプレデター無人戦闘機が引きずり出され、地对空ミサイル、QRF（緊急対処部隊）がせわしなく飛び出してくる。これは敵襲があつた証明だ

「ッ!？」

背後の金網から火花が散り律は慌てて伏せ振り返った

「!?!?……民間人？」

金網の向こうには迷彩服では無くラフな服装の男達がいた。一見一般人だがその手には自動小銃がしっかりと握られている

朝鮮軍に同調する市民団体が存在するという話は聴いていない。ありえるのは市民に扮した掃討から逃れた残存朝鮮兵達だろう

律は銃撃が止むのをひたすら待ち続けた。こっちは銃剣一本、勝ち目は0に等しい。小銃はコットに立てかけておいたままだ

「どろろって言うんだよ！」

思わず叫んだ

「Down!Down!」

銃声の向こうからそんな声と共に重低音が聞こえてきた。振り返ってみれば米軍のハンヴィー多目的装輪車両が近づいてくるのが見える。ハンヴィーに備え付けられたM134ミニガン（ガトリング）が唸りを上げ男達をミンチに変えていく

「ダイジョブデスカ!？」

M134を操っていた米兵が叫ぶ。

「助かった!ありがとう!Thank you!」

親指を立ててアピールすると米兵も満足そうに親指を立ててハンヴィーは去っていった

「りっちゃん!」

振り向くと唯達がいた。彼女達はTシャツと戦闘服のズボンに小銃を持っただけの軽装だった。梓はそれに無線機を背負い、澪は小銃

を2つ持っている

そのうちの1つを律に投げ渡す。更にポケットからマガジンを2つ引き抜くと律のポケットに押し込んだ

律は受け取った89式のボルトを引き初弾を薬室（銃弾を撃ち出す機構）に送り込む

「状況は!？」

クセから漣にそう聞いた

「わからない。ただパトロールの戦闘ヘリが撃墜されたって……。とりあえず担当区域に行こう」

漣達は走り出した。

漣達の所属する小隊の担当警戒区域は車両進入用のゲートだ。ゲートは閉ざされゲート左右にそびえ立つ監視檣ではM2重機関銃とサイチライトが睨みを利かせている

すでに大勢の第3小隊の兵士達がゲート向こうに向け小銃や機関銃を向けていて漣達も同じようにする

「ゲート開ける!」

ガラガラとゲートが開き小型の戦車のような外見の87式偵察警戒車と高機動車達を通過させる

上空をプレデターが通過しAH-64DとOH-1がそれを追うように飛行していく。敵の壊滅も近いだろう

数分後、遠くで立て続けに爆発が響き地平線が光った

「……………了解しました」

葵は無線機を無線兵の背中に戻した

「敵は壊滅、墜落したヘリの乗員の救助はA中隊が出すらしい。以上解散っ！」

号令で兵士達がずらずらと帰って行く。漣達黙ったまま直立不動だ

「じ、じゃあ戻るっぜ」

気まずい空気から逃げたくなりターミナルビルに向け踵を返し歩き出した

「律……………」

漣の声に律は立ち止まって振り返った

「じゅめんー！」

漣はそう言つと頭を下げた

「ムギが怪我したのは律の言ったとおり私が勲章欲しさに暴走したからだ。本当にごめん」

律は漣に歩みより肩に手を置いた

「私も言い過ぎた。ごめんな？」

意外だった律の反応に皆が少し戸惑った

「考えてみたんだけど、漣がいたからこそまで誰も欠けずに来れたんだと思う。私や唯が指揮官だったらとんでもない事になってたと思う……。責任感とか判断力とか……」

指揮官は部下の命を預かっている。その責任はすごく重い筈だ。それに伴うプレッシャーも重い筈、漣がそれを背負っている事も考えず自分は好き勝手に言い過ぎた事を律は悔やんでいた

「だから漣、これからも頼む」

「うん。なんか、ありがとう……。また私も間違った判断するかもしれないから、その時は頼むな」

「一件落着いて感じですね」

梓は2人を見て唯にそう言った

「ううん、あずにゃん、ムギちゃんが帰って来てみんな集まって初めて一件落着なんだよ」

「お姉ちゃんいい事言うね」

「いや〜もつと褒めて〜」

「せっかくのムードが……」

翌日、彼女達は関西へ向け飛び立つ

すれ違い2 (後書き)

感想、意見

お待ちしております

新兵（前書き）

久しぶりの投稿ですー；

## 新兵

「着陸態勢に入る！」

誰かの声が機内に響き渡る。

”ビー”という鈍い音が機内に響き機内のライトが全て赤に変わる。唯達は慌てる事無くヘルメットを拾い上げそれを被った。腕時計（防水・耐衝・防塵）の高度計スイッチを押しした。みるみる高度が下がっていくのがわかる。ガクンという着陸独特の振動が発生し、やがて”ゴォー”という音でエンジンを逆噴射し減速を謀っている

やがて機体は停止した。クルーチーフが親指を立てOKのサインを出す。唯達はシートベルトを外し立ち上がる。背囊リュックと89式小銃を背負い機外へと進む

「Good Luck・（幸運を）」

クルーチーフの笑顔に笑顔を返し唯は地に足を着けた

ジャリついた滑走路、はためく日米の国旗。最近日米軍が制圧した関西空港だ。

周りを見渡すと他の輸送機からも日米の兵士や車両が吐き出されている

《D中隊は2番格納庫前に集合！整列しろ！》

各中隊長やその代理が拡声器を使い自分の中隊を呼び寄せる

兵士達はそれを頼りに歩みを進める。唯はふとよそ見した

5台の大型トラックが重いエンジン音を響かせ1番格納庫前に停車した

「さっさと降りろ！急げ！」随伴の兵士に煽られ数十名の新兵達が地に降り立つ。性別、年代は様々だがどの顔も緊張で強張っている

以前の私達みたい

唯は彼の日の自分達と目の前で狼狽える新参者達を重ね合わせた彼らは格納庫にゾロゾロと入って行く

「唯！」

「あぁっ！待って待って！」

漣に呼ばれ慌てて列内に駆け込んだ

次の日

射撃場

タン タン タン タン

数々の銃口から弾が放たれ木製の的に穴を空ける。唯達を含め兵士はガムを噛みながらや談笑しながらと緊張感に欠けている。しかし射撃位置に立つと一変し真剣な表情へとなる

「ナイス」憂の見事な射撃を律は口笛を鳴らし讃えた。憂は照れくさそうに笑い礼を述べ射撃位置から離れ小銃の点検を始めた

入れ替わりに唯が射撃位置に立とうとした時、射撃中止の笛が鳴り響いた

「射撃中止！射撃中止！弾倉を抜いて安全装置掛ける！」

小隊最年長の古参が年季と気合いの入った口調で怒鳴った

全員が即座に銃口を下げ、指示された動作をこなす

「第3小隊集合！」

無駄の無いキビキビとした動作で葵を取り囲み直立不動になる

「本日より！また新たな仲間が加わる！その数17名！よって今の32名と合わせて49名となる！彼らは直に合流する！そして本日1730（ヒトナナサンマル）時より中隊本部にて会議がある！各指揮官は出席する事！」

透はやれやれと顔をしかめた

「解散！訓練に戻れ！」

解散命令に全員が射撃位置や整備テーブルに戻ろうと踵を返す

「澪ちゃん達」

葵は澪達を呼び止め手招きした。澪達はそれに従い葵の背について行く、するとOH-1Bの裏で葵は立ち止まり振り返った

「ムギちゃんの事なんだけど……」

暗い葵の表情で全員が悟った

ムギは帰ってこない

表情が暗くなる。当たり前の事かもしれない。一度撃たれた相手に『また戦場に戻って来い』というほうが間違っている。「わあっ!!」

「「「「「ギヤ

「!!?!?」「「「「「

唯は薄目を開け犯人を確認、そして驚愕した

「ムギちゃん!?!」

「いえいつ」

そこには迷彩服姿の紬の姿が

「おかえりー!!」

「ムギー!!」

「無事で良かったです!」

唯、律、憂は立ち上がり紬を取り囲み歓迎する。抱き付いたり手を握り締めたりと歓迎の仕方は様々だが

「漣先輩!? 漣先輩!?!」

漣は吃驚のあまり放心、梓はその対応に追われていた。梓が揺する漣は漫画風に表現するなら間違い無く真っ白だ。どうやら漣の小心は健在らしい

「ごめんね? 漣ちゃん」

「大丈夫だよ。それより無事で良かった……」

そこで一息いれた

「ムギ……。なんて言ったらいいかわからないんだけど、……ごめん! 私が無茶な突入を決行させたから……本当にごめん!」

漣は頭を下げた

「私なら大丈夫だから。澪ちゃんは澪ちゃんの仕事をしただけ、あの時は私が気を抜いちゃったから、澪ちゃんが負い目を感じる必要はないわ。それに……」

「それに？」

「私軍の病院に入ったの初めてだったの。いい経験になったわ」

なんてポジティブシンキング。軍の病院に入るのなんてほとんどの人間が未経験だろう

「でも後方に転科も可能だったんでしょ？」

唯が聞く

すると紬は目を細め

「みんなを置いて独りになるなんて嫌だから」

純粋な笑顔を浮かべそう言った

「……………ムギ（ちゃん）（先輩）……………」

全員がちよつと感動した瞬間だった

「じゃ、全員揃ったところで、任務があるの」

頃合いを見て葵が指示を出す

「はい！」

紬も帰って来た事による勢いで快く受けた任務

それは

補充の未成年兵の指導

「はい？」

「私たちは補充の大人の面倒もみなくちゃいけないからさ、曹長にもなったんだから任せるわ。何か困った事があつたら無線連絡で、内容はそのメモに書いてあるから、じゃああとで連絡するから」

葵は颯爽と走り去って行った。

「私が指導員なんて」

重い足取り（特に漣）で指示された場所に向かう。そこは米軍が持ち込んだ実戦的な射撃訓練が可能となっている射撃訓練場だ。兵士からはピットと呼ばれている

「まあ基礎訓練済ませてるだろうから適当にやれば大丈夫だろ！」

律が元気出せよと言わんばかりに漣の肩を叩く

「でも」

「あ！あれじゃない！？」

滑走路から少し離れた大きな溝、その中にピットがある。ピットへと入る階段の辺りに数名の兵士達がいた。手には89式やMINIMI、だが弾倉は持ってなさそうだ。自分達は今フル装填した弾倉を持っている。その辺が新兵との差なのだろう

「おーいー!!」

新兵の内の一人が手を振って近づいて来た。声からして女性

「誰？ 溲知り合い？」

「さあ、違うと思うけど」

「さわちゃんかな!？」

「声からしてさわ子先生じゃないと思うけど……」

誰もが顎をつまみ考える中彼女は溲達の間近まで来るとヘルメットを取った。ヘルメットによりペシヤンコになった2つの小さな髪の毛、見覚えのある顔

「へへへ……。憂、梓、久しぶり、先輩方も……」

「「「「「「……」」」」」」

全員がかたまった

しばらくして……

「「じゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅ純ちゃん!？」」

憂と梓が驚きの声を上げた。それもそのはず、目の前で苦笑しているのは自分達の同級生、鈴木純なのだから

「気づくの遅くないっ!？」

「どろどろどろどろっしてこっに!？」

「梓ちゃん落ち着いて!!」

なんとか梓が落ち着いたところで純はワケを話し始めた

「お父さんが死んじゃって、近所の工場でバイトしてたんだけど近代化とかいうのでクビになって……。それで志願したんだ。家族への配給も有利になるって言われたし……」

それから純は色々な情報をくれた。桜ヶ丘はある程度の生活レベルに戻った事、全員の家族は元気に生活している事など

今日は驚く事ばかりだ。紬が帰って来たかと思えば同じ隊に知った顔が配属になるとは

「じゃあ純ちゃんとりあえず戻って」

憂が純を返す

「ちゅうもーく!」

律の元気な声に新兵達の視線が集中する。その顔は恐怖に怯えているものもあれば落ち着きのあるものまで様々だ

「えー、私達があなた達の指導員に任命された隊の者です」

漣が落ち着いた下士官らしい態度でいい自己紹介をする。唯達も自己紹介を済ませる

「じゃあ1人ずつ自己紹介して。名前と年齢、そしてなにか一言律はめんどくささを感じさせない口調と笑顔で言う」

一番右端の女子が一步前に出た

「戸川愛、15歳です。よく間違えられるので一応言っておきますが男です」

男だったようだ。

次に隣りの男子、愛といいこの男子といいどこか唯に似た雰囲気がある

「平沢頼、18歳です。趣味はギターの練習です」

「「ギター!?!」」

唯と梓が食いつく

「唯!つて梓まで!?!」

すかさず漣がツツコミに入り話を戻す

次も男子だ

「檜澤翔、18歳。爆発物とかの扱いは任せて下さい。割と詳しいんで」

俗に言うミリタリーマニアか何かだろう

そして純の番だ

「鈴木純17歳です。馴れない事ばかりなので足引っ張るかもしれませんがよろしくお願いします」

なんか変な感じ、と憂が呟いた。どうやらこの4名が新入りのようだ

「じゃあ時間もなしさっそく射撃訓練見てみようか」

澁の先導でピットへと続く階段を降りた。フェンスを開き待機所に全員を入れる。その間に唯と紬は補給所に向かい弾薬を調達する

待機所ではターゲットを起動させるスイッチとマイク、数台のモニターがありピット内の状況が手に取るようにわかる

因みにピット内は4つのエリアに分かれており市街地エリア1、室内エリア1、室内エリア2、市街地エリア2、この4つのエリアをターゲットを撃ち倒しながら駆け抜けるといったコースだ

「じゃあ最初にこの平沢憂一等兵が手本を見せるから、憂ちゃん、大丈夫？」

「はい！任せてください」

澁に笑顔を見せ自分の89式のスコープを外しエリア内へ続くフェンスを開いた

モニターには憂の後ろ姿が映る

憂がカメラにOKサインを出したことを確認し澁はボタンを押した

《スタート!》

溲がマイクに向けそう言うとはほぼ同時に市街地エリア1内のターゲットが起き上がる。スチール製の薄い板に銃を構えた男が描かれている。市街地エリア1では廃車やドラム缶、トタン板を障害物にそれが12つ現れる。憂は的確にそれを撃ち抜きエリアを駆け抜ける

《室内へ》

室内エリア1に入ると民間人も現れる。無論撃てば減点だ。憂は兵士だけを撃ち抜き、撃ち損じ2発で室内エリア1をクリア、階段を上がる

階段を上がりきった所にターゲットが現れる。弾帯（ポーチなどを取り付けるベルトのような物）から銃剣を抜き取り斬りつけクリア。室内エリア2へと移行した

それから民間人を撃つこと無く室内エリア2をクリア、二階から飛び降り市街地エリア2をクリア、合計34のターゲットを倒し、撃ち損じ4発、タイムは36秒という結果だ。指定タイム1分、平均タイム37秒という事から憂の技量が伺えるだろう。因みに最高記録は米レンジャー隊員が出した24秒という化け物じみた記録となっている

「終わりました」

戻って来た憂に礼と賛辞を述べ溲は説明を始める

「慌てなくていいからの確に、ターゲットをターゲットじゃなく敵だと思つてやるんだ。装填は必ず遮蔽物に身を隠しながらや敵がない状況で慌てずに、民間人を撃つた場合は……」

葵に渡されたメモに目をやる

「排泄物の処理……」

あーあ、と律が他人事のように笑った。あの溜まった糞尿にガソリンをふりかけ鉄棒でかき回しながら燃やす作業だ。あれは大概何かやらかした連中が罰としてやるような作業だ。多分これは脅しの一貫だろう。新兵達もこの作業は訓練所で聞いている事だろう

「じゃあ誰から行く？」

「じゃ、じゃあ僕が」

頼がエリアに入った……

数10分後……

「ひどい臭いだな……」

律は不満を漏らした

「まだ監視だけならマシだろ？」

透は鼻を押さえ律の不満を宥めようとし

「まさか全員見事に誤射するなんて」

紬は苦笑いを漏らし

「うう……気持ち悪い……」

「お姉ちゃん大丈夫？」

「医務室行きます？」

唯は憂と梓に励まされていた  
彼女たちの近くでは……

「ああー！クツせえ！」

「なんて臭いなんだ」

「うぶっ……」

「うう……」

翔、頼、純、愛が仲良く四人で糞尿を燃やしていた。翔と愛は2人、頼と純は4人の民間人を見事に射殺したのであった

「そう言えば音楽フェスどうする？参加は辞退したけどやっぱり観にいくだろ？」

「もちのろんだよ澪ちゃん！」

「そうだぜ澪！久しぶりの祭り、行かないわけがないっ！」

「お祭り？私焼きそばが食べてみたいわ〜」

中隊本部

D中隊各指揮官達が薄暗い天幕内でパイプ椅子に腰を掛けている。  
無論溇の姿もある

「きょーつけっ！」

中隊長付き無線兵の叫びに指揮官達が無駄のない動作で立ち上がり  
直立不動の姿勢を取る、その中央を河原中隊長が独特のオーラを放  
ち通り抜ける

「ご苦労、掛けてくれ」

河原はそう言うと全員が腰を下ろした。映写機が起動しスクリーン  
に日本地図が映し出された

「現在徳島の一部を除く四国全域、淡路島、兵庫県より福岡県は敵  
の支配下となっている。第15師団は四国に回される。59連隊は  
海兵隊と共に徳島県牟由海岸に強襲上陸する。2週間後だ。激しい  
戦闘になるだろう」

溇はゴクリと生唾を飲み込んだ。某戦争映画冒頭の戦闘シーンが脳  
裏をよぎる

「上陸前には特殊任務部隊が先行し海岸に設置されたSAM（地对空ミサイル）を破壊する。牟由海岸沖合までは海自に運んでもらい、そこからはヘリによる強襲上陸だ。空と海からの攻撃だな。砲撃支援も充分に受けられる」

そこで一息つく

「で、もうすぐ日米の音楽祭がある。3日間に渡る大イベントだ。戦闘に入ったら娯楽もないだろう、戦闘の事は一時的に忘れ、思いっきり楽しんでくれ」

新兵（後書き）

感想、ご意見  
お待ちしております

番外：登場人物と勢力（前書き）

今更ながら^^^；

けいおん！メンバーは劇中設定です

## 番外：登場人物と勢力

河原 勤（41）

階級：大尉

第15師団第59連隊D中隊の指揮官。自衛隊時代から軍にいる職業軍人、身長185cmの巨漢、常にサングラスを掛けている。喫煙者

真木 葵（26）

階級：少尉

第15師団第59連隊D中隊第3小隊の指揮官。防衛大学出身の職業軍人、部下の面倒見が良く部下からも評判がよい。喫煙者

根元 修造（24）故

階級：曹長

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第2分隊指揮官。開戦前から軍にいる職業軍人。既婚者だったが東京の核爆発で妻子を失い性格に異常をきたす。澁達に冷たい態度を取るが最終的には仲間達を手榴弾から守り戦死

秋山 澁（18）

階級：軍曹 曹長

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第5分隊指揮官。新兵訓練の適性試験で下士官に選抜されてしまう。精神面が脆く徴兵直後は泣き出したり貧血で倒れたり脆さを露呈させていたが最近では戦場で”生”を感じつつある。戦闘中は髪は後ろで束ねている

田井中 律（18）

階級：伍長

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第5分隊小銃手兼指揮官補佐。適性試験により指揮官補佐へ、唯達軽音部のメンバー達を除隊させる議会名誉勲章の為、一番早くに戦争と向き合った。仲間の無事を第一に考えており澁の判断ミスで紬が負傷した際には激怒した

琴吹 紬（18）

階級：兵長

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第5分隊分隊支援火器手。高機動車のM2重機関銃射手も務めている。体力、腕力は分隊内で1位、その為、重さ10kg近くある軽機関銃を担当している。負傷のため一時的に入院していたがすぐに帰って来た

平沢 唯（18）

階級：兵長

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第5分隊小銃手。射撃の腕はいいが判断力に欠けている。銃の分解、整備のスピードは分隊内で1位、人を殺しても何も感じなくなった自分に苦悩している

中野 梓（17）

階級：一等兵

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第5分隊無線手。無線兵のため戦闘中は金魚の糞のように澁に随伴している。実は誰よりも軽音部の部室に戻りたい人。戦闘中はツインテールは後ろで束ねている

平沢 憂（17）

階級：一等兵

第15師団第59連隊D中隊第3小隊第5分隊選抜射手。射撃の精度は中隊内でも1、2を争う腕前を持ち新兵訓練所でも模範的存在となっている。最近狙撃訓練で『ビューティフォー』と呟いている

真鍋 和（18）

階級：一等兵

第15師団第21連隊G中隊第2小隊第4分隊小銃手。唯達と共に避難所の物資補給任務からの帰投中敵のゲリラ攻撃に合い頭部を負傷、現在は部隊に復帰している

随時更新予定

勢力・組織

日本国臨時政府

東京の核爆発により政治機能が失われたため幸いにも難を逃れた防衛大臣が防衛省幹部や自衛軍幹部と共に設立した臨時政府

日本国自衛軍

大朝鮮連邦誕生2ヶ月後に自衛隊より改編された組織。人員、予算も大幅に引き上げられている。自衛隊の編成とは多少編成のしかたが異なっている

第15師団第59連隊

唯達が所属する連隊、師団マークはトマホーク（小型の手投げ斧）とマチェット（鉞）を模した物。諸兵科連合部隊（様々な兵科の連合部隊）の為人数が通常の連隊の倍近くなっている。戦争の影響で消耗が激しく現在連隊の人員1・600名の内の6割が徴収兵となっている。

編成

連隊本部（指揮所）

本部管理中隊

- A 中隊 - 自動車化歩兵 (車両による機動力を有した歩兵)
- B 中隊 - 自動車化歩兵
- C 中隊 - 機械化歩兵 (装甲車両による機動力を有した歩兵)
- D 中隊 (唯達所屬) - 機械化歩兵
- E 中隊 - 砲兵
- F 中隊 - 戦車
- G 中隊 - 工兵

#### 大朝鮮連邦

朝鮮民主主義人民共和国による武力統一で誕生した国家。「米帝の傘下にある日本を解放する」という名目で日本に侵攻。中国地方、近畿地方と侵攻し横暴の限りを尽くすが体勢を立て直した自衛軍に徐々に押し戻されていく

#### 中華人民共和国

言わずとしれた大量生産国家。現在国境付近でロシアと戦争状態だが東シナ海で不穏な動きを見せている

#### 大韓民国亡命政府

朝鮮統一時に敗退した韓国軍兵士達と政治家達が設立した軍事組織。本部を熊本に置き自衛軍と共闘中。人数は約1万6千人。朝鮮半島の解放を目指しているが大朝鮮連邦からはテロリスト扱い

#### タスクフォース183

日米露の特殊部隊を統合させた特殊任務部隊。作戦使用言語は英語の為高い英語力が求められる。日本からは特殊作戦群が参加している (番外編に登場予定)

T A S K F O R C E & I t ; i & g t ; ( 前 書 き )

番外編です。

TASK FORCE & It・i & gt ;

朝鮮領 タンチョン沖

日本海上空に漂う霧の中を多くの”卵”が羽音を奏でて飛行している。

AH-6とMH-6の編隊だ。

、AH-6は両サイドのウィングにM134ミニガン（ガトリング）とハイドラ70ロケット弾を2門ずつ装備し、MH-6は両サイドに取り付けたベンチに6名の兵士を搭乗させている。彼らの肩にはT・F・183と刻まれた髑髏のワッペン。タスクフォース183所属の兵士達だ。

アメリカのSEALS（海軍特殊部隊）、ロシアの第45独立親衛特殊任務連隊、イギリスのSAS（陸軍特殊空挺部隊）、日本の特殊戦群と各国の精鋭達の中から選ばれた精鋭中の精鋭部隊だ。

ジム・ライアンは吸っていた煙草を投げ捨てた。そして愛用のM4A1の調子を確認し隣りを見た。隣りでは分隊長のトム・マザーズ中尉がM4の調子を伺っていた。

「奴ら驚くぞ」

「ああ、まさかあの”施設”の存在がバレしているとは思ってもないだろう。それにこの部隊」

トムは笑った。彼らの視界にはMH-6が14機、AH-6が4機飛行している。6人1組で分隊を組み7分隊でひとつの小隊を組んでいる。MH-6は14機飛行しているので2個小隊を運んでいる事となる。

「まさに少数精鋭」

「しかし寒いな……」

朝鮮の冬は寒い。ジムらもヘルメットにバラクラバ（目出し帽）、最新の防寒戦闘服、防弾ベストなどを着込んではいるがまだ寒い。

「もうすぐだ。我慢しろ」

トムの言葉通り、すぐに白い霧の中から海辺に聳える巨大な工場が姿を現した。

「工場にガサ入れだな」

大朝重工タンチョン工場

別名、大朝鮮連邦人民軍情報軍本部

「ヒュドラ（AH-6の呼び出し符号）、何発かお見舞いしてやれ」

《ヒュドラ1了解》

《2了解》

《ヒュドラ3了解》

《ヒュドラ4了解した》

ヒュドラ達がスピードを上げ搭載火器を工場の詰め所や車両に撃ち込んで行く。警報機が作動する。

「いいぞ。もつとやれ」

「奴ら驚いてるぞ」

ある程度のダメージを与えたところでMH-6達も工場に近づいていく。兵士達を工場に送り込むためだ。

小隊ごとに別れ突入する。屋上、地上からだ。ジムらの所属する第1小隊は地上からの突入だ。

《リトルバード（MH-6）目標にタッチダウン！》

7機のMH-6が土埃を巻き上げ空きスペースに着陸、漆黒の戦闘員達を下ろし離陸して行く。

「GO！GO！GO！」

ムダのない動きで工場入口に警戒しつつ駆け寄る。無論ここは工場に化けた軍事基地だ。敵兵がないはずがない。

「11時の方向に軽歩兵！」

軽歩兵が飛び出して来る。白主体の冬季迷彩に身を包みK-2自動小銃を手にした3人の朝鮮兵だ。

「好きに撃て！」

「じゃ遠慮無く！」

ジムはM4を朝鮮兵達に向け5発撃った。2人の朝鮮兵は息絶えたが1人は脚に当たっただけで大破した4WDの影へと身を隠した。ジムはM4を下げるとポーチから手榴弾を取り出した。

「グレネード！」

安全ピンを抜き4WDに向け放った。すぐに4WDの向こう側で叫び声が響き爆発によりかき消される。

「3時の方向から敵車両2台！」

2台の4WDが朝鮮兵を満載しやって来た。

《こちらヒュドラ3、車両を吹き飛ばす。注意しろ》

ヒュドラ3が低空で急接近しロケット弾で4WDもろとも歩兵を吹き飛ばした。

その隙に部隊は侵入のため裏口に接近した。裏口のドアにC4爆薬を設置。

「3…2…1！」

爆薬が爆発し圧力で扉が吹き飛ばされる。

「GO!GO!」

すかさず突入、衝撃と埃にしどろもどろする敵をすかさず排除する。

「クリア!」

ボロボロの鉄製の階段を下っていくと工場の風景には場違いなカードリーダーと扉が現れた。

「ジム!」

「了解!」

技術兵であるジムは携帯式電子計算機のような端末を取り出し接続されたコードをカードリーダーに接続した。

「さあカワイ子ちゃん。開いてくれよ……」

端末を操作する。

すぐに認証の機械音が鳴りロックが解除される。

この道15年のベテランを自称するだけあつてジム(25)にとってこの手の仕事は赤子の手を捻るより簡単だ。

親指を立ててOKサインを出す。ここから先は極力ハンドサインのみで意志を伝え合う。

扉の向こうに続く白い廊下を進んでいく。すでに警報機が作動し警報が廊下内を木霊していた。それを気にする事なく彼らは進んでい

く。

曲がり角で先頭を進むジーン・ディアス軍曹が握り拳を上げた。これは止まれの合図だ。兵士達はそれに従い壁に張り付いた。

敵4人、排除

ハンドサインでそれを知らせ指でカウントを始めた。ゼロになったと同時に4人が飛び出し敵を排除する。敵が絶命した事を確認し廊下を進んでいく。

ときおり出くわす朝鮮兵達を排除しつつ前進していくと一つの扉に突き当たった。ジーンがハンドサインを出す。

トムとジムが扉の左右に張り付きメインアームからサイドアーム（USP・45ピストル）に持ち替え突入準備を整えた。

トムが白い板状の爆薬を扉に貼り付けた。

爆薬が炸裂し木製の扉が粉々に吹き飛ばす。それと同時に室内を覗き込み警備兵達を素早く、的確に45口径弾を撃ち込む。

「クリア」

この部屋にはモニターやパソコンが並べられてあった。警備室だろう。

「よし、ジム、警備システムを乗っ取るんだ。あと”小包”の位置も頼む」

小隊長ビル・バーンズ大尉がジムにそう命じた。

「了解」

ジムは先ほどの端末をメインコンピュータに接続し操作を始めた。そして小さな装置を取り出しメインコンピュータに装着した。

「O k e y。これでこの端末から操作可能だ。」小包”は恐らく地下2のオフィスエリアだろう」

「よし、前進する。ジーン、お前が先頭だ」

ジーンが先頭で警備室を出る。

《ブッチャー1（第1小隊）、オキサイド（作戦司令部）だ。敵増援を乗せたヘリ部隊と戦闘機が空軍基地を出発した。10分以内に片付けてくれ》

「りょーかい」

ビルは気だるそうに返す。しばらく廊下を進むと下層に続く階段を発見した。

「こっから先は停電してるぞ。ヒュドラ共の大暴れで配線がやられたんだろう」

ジムは端末を見るとそう知らせた。確かに階段を下りると全ての電灯が役割を果たさない暗闇の空間が広がっていた。

「ナイトビジョンを装着しろ」

ビルの指示で全員がナイトビジョンを下ろす。熱が高いものは白色になり熱が低いものは黒く表示され暗闇の中に廊下の風景が現れる。同時に各員の持つ銃の照準器から不可認性のレーザーが伸びているのがわかる。

「オフィスはこの通路を真っ直ぐすすんだ突き当たりだ」

ジムの言葉通り、Officeと記された扉に突き当たった。

「ジーン」

ビルの指示でジーンが扉をゆっくりと開いた。次の瞬間、彼は銃声という音楽に合わせ死の舞を舞い、後方に倒れた。

「ジーンがやられた！」

扉を蹴破り室内に向け軽機関銃が乱射される。その間にビル達が室内に雪崩れ込み、デスクやコピー機を盾に戦闘を開始する。

「奴ら待ち伏せてやがったか……！」

ジムは歯を噛み締めた。ジーンを失った悲しみは怒りへと変わる。ジムは銃身の下に取り付けたM203グレネードランチャーを4人程の敵の後方の壁に向け放った。グレネードは放物線を描き狙い通りに壁で炸裂、4人をズタズタにした。

「機関銃手！前へ！スタングレネード（閃光音響筒）！」

ビルは敵部隊の前にスタングレネードを放りながら怒鳴った。暗闇

が一種、ものすごい閃光と爆音で満ちる。M249 軽機関銃を持った2人の隊員が飛び出し閃光と爆音に苦しむ朝鮮兵達を掃射した。これでオフィスルームを制圧した。ビームライトで辺りを照らしながら前進する。ふと影が横切った。全員が反応しビームライトを照らす。逃げるように走るその後ろ姿はどう見ても将校だ。

「あいつだ！逃がすなよ！ジム！脚だ！脚を撃て！」

「わかつてる！」

ジムはM4を構えると逃げる将校の脹ら脛に向け立て続けに三回引き金を引いた。

「グウツ！」

将校は倒れた。

「動くなっ！」

倒れた将校にビームライトと銃口を突きつける。やはり目当ての将校だ。将校は脚を押さえ痛みにも苦しんでいた。足首に小さな穴が空きそこからドクドクと脈打つように出血している。ジムの放った5・56mm弾が将校のアキレス腱を傷付け脚を貫通したのだ。

「大朝鮮連邦情報軍第7部隊のパク・ヨンジエ中佐だな！？」

トムが将校の胸倉を掴み壁に叩きつけた。将校は恐怖から首を縦に振り、オマケに身分証を兼ねたカードキーまで提示してきた。

「間違いない。袋を被せる。こちらブツチャー指揮官、小包を回収した。至急回収へりを回してくれ」

《オキサイド了解。5分でペイブ로우がポイントブラボーに到着する。アウト》

「よし、撤収だ」

T A S K F O R C E & I t ; i & g t ; ( 後書き )

御感想、御質問

お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2841u/>

---

けいおん！～戦場でも歌うよ！～

2011年12月12日00時50分発行